

甲南英文学

NO.9 ❸ 1994

甲南英文学会

編集委員

(五十音順, *は編集委員長)

青山義孝 岩田良治 田中紀子 *常松正雄 中島俊郎 析矢好弘

目次

Dora と Rosamond—その死と生を巡って—……………山口 徳一 1

The Absence of Mother

and Pip's Mental Deadlock in *Great Expectations*

……………Kazuho Yoshida 17

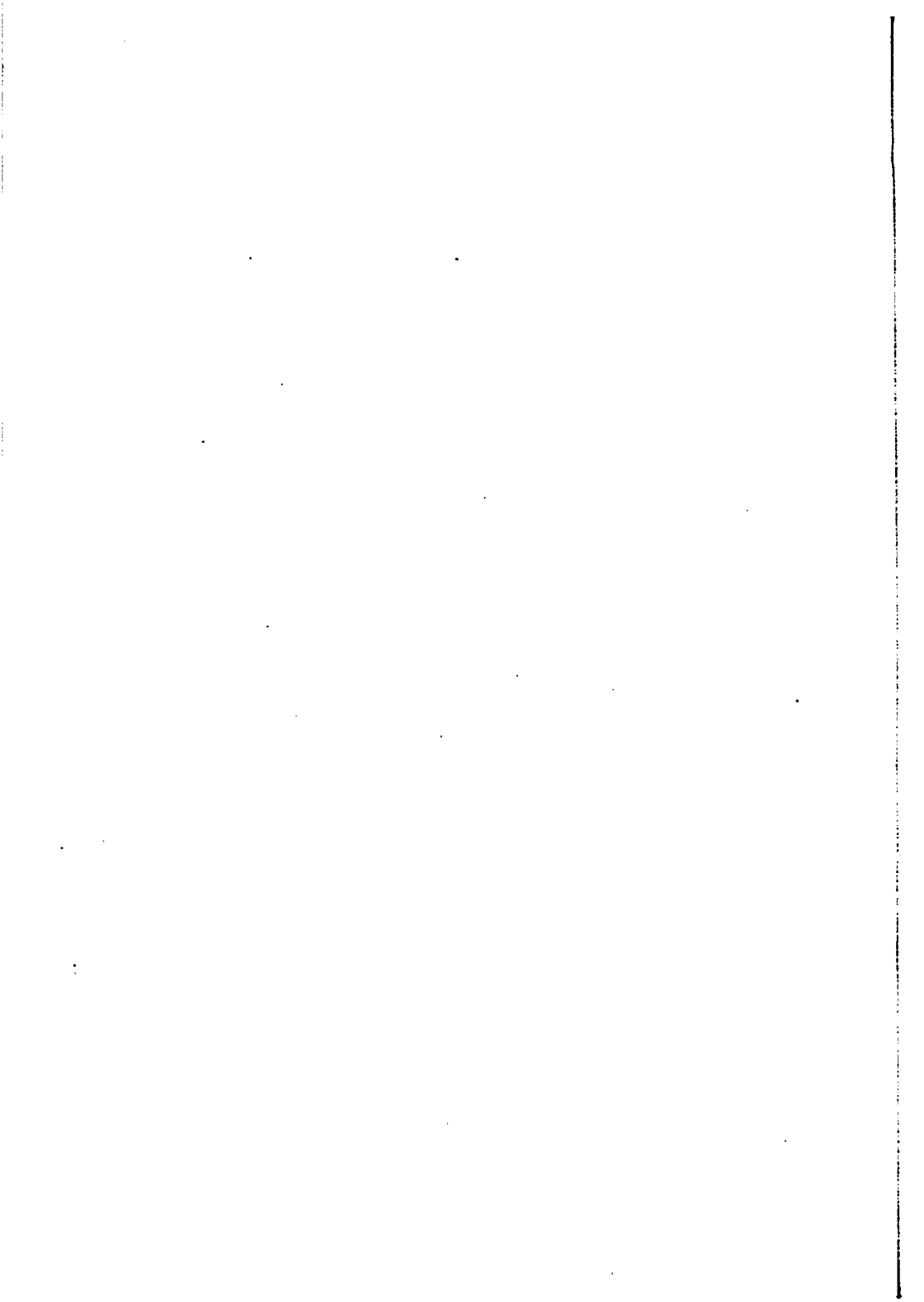
The Temple of My Familiar

—調和による未来の模索……………中野 淑子 31

語構造のパラドックスと音律構造

—経済性の原理との係わり—……………西原 哲雄 45

日英語の音節構造について……………豊島 庸二 61



Dora と Rosamond — その死と生を巡って —

山 口 徳 一

SYNOPSIS

In David Copperfield Dickens has often been criticized for removing Dora while allowing David to live happily ever after. It is true that Dora is an egoistic woman, but she is also innocent. This very innocence, it seems to me, makes it impossible for her to live when she becomes aware of David's suffering from their married life.

This case of Dora and David makes a striking contrast with that of Rosamond and Lydgate in Middlemarch by George Eliot: Rosamond, who is very egoistic as well as snobbish, lives to an old age despite suffering from their married life.

Each case mirrors both the authors' view of life: Dickens, a romanticist, makes Dora by her death as one of his idealized characters innocent and self-sacrificing, whereas Eliot, a realist, has Rosamond struggle with her marital problems.

序章

Dickens has been scolded by critics for not seeing David's first marriage from the woman's (Dora's) point of view¹, but, instead, solving David's problem by the easy expedient of removing her by death and, even worse, exonerating David from guilt for it by representing her as willing to die in order not to be a burden.¹

上述の Q. D. Leavis の言葉に代表されるように、*David Copperfield* における Dora Spenlow の死は、男性の立場のみに立つ、女性に対しては全く不当なものであるように解されて来た。とりわけ David が、Dora の死からはほぼ 3 年経過したとはいえ、彼の成功物語にふさわしい、真に理想的な女性である Agnes Wickfield と都合良く結婚してしまう、

といった物語の結末から、その死の不当さが一層強調されて来たわけである。さらにはまた、その結婚は、物語中のエピソードを通して、徐々に成長を重ねて来た David の、いわゆる 'learning process' を台無しにしてしまうようなものにしか受け取れない、言い換えれば、まるで最初の誤った結婚という彼の愚行に対する素晴らしい報酬でもあるかのような印象をさえ読者に与えてしまう²、というところからも、Dora の死は、作者 Charles Dickens の、女性の立場を無視した男性的なエゴイズムと評されて来たのでもある。しかし、果たしてそのように Dora の死は、単に作者のエゴイズムに立脚したものに過ぎないのであろうか。Dickens は、"the first mistaken impulse of an undisciplined heart"³ から生じた David の未熟な結婚の失敗を、妻の死によって簡単に解決させようとしているのに過ぎないのか。

ところで一方、この誤った結婚による妻の死という構図と明白な対照を成しているのが、かの女流作家 George Eliot の代表作 *Middlemarch* における Tertius Lydgate と Rosamond Vincy との結婚である。というのもそれは、David と Dora の場合と同じく、誤った結婚の物語ではあるが、妻 Rosamond の死によって二人の関係に決着が付けられることはなく、彼女はその結婚生活を夫が五十歳で他界するまで、生き抜いているのだから。そこでここでは、その二つの誤った結婚を中心に比較検討をし、それぞれの最も明白に異なった観点、つまり死に行く妻と生き抜く妻という観点から、そこに現れてくる意味を論じてみたいと思う。

I

18 世紀に興った産業革命は、19 世紀を迎えて益々勢いを加え、イギリスの政治経済等各方面に渡り、様々な影響を及ぼしていった。その数々の影響の中でも、とりわけ家庭生活に残された足跡は甚大であると言ってよい。産業革命以前の家庭内手工業が主であった時代には、男女の役割の分極というものが存在することは、あまりなかった。しかし大規模な工業化が進むに連れて、男性は家の外に働きに出かけるようになり、一方女性は家庭を守るという役割を担うようになる。その結果、職業からほぼ完全に切り離された女性達は、結婚によってしか生きていく

手段が無くなり、それ故に妻の夫への依存という構図が、生じて来るようになったわけである。正しくそういった事情、つまり男性を中心とした職業と、女性を守るべき家庭という生活体系の中で、中産階級の道徳的厳格さとも相俟って、ヴィクトリア朝の女性像というものが登場するようになる。その女性像を明確に定義付けることは困難だが、例えば Patricia Thomson によれば、それは「謙虚さ、慎み深さ、貞淑さ、繊細さ、そして美しさ」を備えた女性ということになる⁴。また特に家庭の主婦に必要とされたのは「従順の美德、熱意、家庭性」というものでもあった⁵。従って、これらから判断しても、ヴィクトリア朝の女性像には、何にもまして、家庭での夫に対する従順さが求められたというのは間違いのないところであろう。Thomas Hardy の小説、*Tess of the D'Urbervilles* において、Angel Clare に一方的に結婚の延期を告げられた Tess が、自分の非のなさにためらいながらも、唯唯として彼に従う、そういう「男性への従順さ」が、女性の理想でもあると同時に、最高のモラルでもあった時代なのである。そして正にこの特質を余すところなく具現しているのが、Agnes と *Middlemarch* のヒロイン Dorothea Brook である。

常に控えめで貞淑な女性であり、David の二度目の妻となる Agnes は、常に彼の良き相談者であり、彼の心の支えとなっている人物である。David の持ちかける様々な相談に、賢明にそして従容として答える彼女。その中には David の恋の相談、つまり Miss Shepherd や Eldest Miss Larkins に対する彼の愛情物語までもある。ところが、実は彼女は David 自身を愛しているのである。Dora の物足りなさを打ち明け、Agnesこそ自分の信頼に足る人物だと告白する David に、にっこり笑って彼女は答える。“But it must not be on me, Trotwood It must be on some one else” (463)。常に自分の気持ちは犠牲にし、David のためのことを一心に考えている女性。それが Agnes なのである。

一方裕福なジェントリー階級に生まれながら、それでいて農民の生活改善を計るという高邁な計画を抱く、これまた貞淑な女性 Dorothea。彼女はあらゆる知識において、自らを導いてくれる男性と結婚することこそ意義あることと考え、自分より二十歳程も年の離れた牧師、Edward Casaubon と結婚する。その彼女の夫への献身ぶりは、著者が語る

Dorothea の夫への気持ちにはっきりと窺い知ることが出来る。

She was not in the least teaching Mr Casaubon to ask if he were good enough for her, but merely asking herself anxiously how she could be good enough for Mr Casaubon.⁶

そんな献身的な彼女の結婚生活は、しかし、彼女の愛情を信じることの出来ない夫のためにほとんど牢獄でしかない。やがて老いらくの夫は突然の死に見舞われ、はからずもその精神的牢獄から解放されることになる。しかしそれにもかかわらず、Dorothea は夫のやり遺した研究に、それが学問的にはあまり大した価値の無いものとは承知しながらも、彼の意志に沿って、うら若い自らの前途を捧げる決心をするのである。(それは、もし彼女が Casaubon の従兄弟 Will Ladislav と結婚した場合には、遺産は彼女へ遺さないと遺言した Casaubon の背信的行為が発覚したため、最終的には放棄されることになるのではあるけれども。) また、やがて Will を愛するようになる彼女だが、その Will と Rosamond との関係に対して、苦しい思いで疑いを抱きながらも、自分の気持ちを抑えて Rosamond のために善意を尽くしてもやる。そういう女性が、Dorothea である。

このように、Agnes と Dorothea に共通する美德である「従順さ」は、明らかに自己犠牲的と呼べるものである。しかも J. Hills Miller が、David の Agnes との関係は「敬虔なクリスチャンが神に対して抱くのと同じ関係である」と語り⁷、F. B. Pinion が、「自分にとって神聖なる意味を持つ以外の宝石に対する無関心さからは、Dorothea の浮き世離れした様子が窺える」と語っている⁸ ことから明白のように、彼女達は、神聖なるイメージさえ纏う、正しくヴィクトリア朝の理想的精神美を象徴する二人なのである。一方そのような彼女達に対するいわばアンチテーゼとして具現されているのが、果たして Dora と Rosamond ということになる。

II

In a world where unpredictability seems to reign, he [the orphaned person] needs warm love and affection to compensate for the mother he has lost⁹

. . . in David's own life, where we see that the little, spoilt child-wife, who was his mother, is absolutely repeated in his choice of a little, spoilt child-wife, Dora.¹⁰

上述の G. H. Ford そして Angus Wilson の指摘がそれぞれ示すような、Dora と David の母親である Clara との類似性が、しばしば議論されてきた。また David は Dora と結婚することによって、結局「オイデブスの探求」を果たしているとも評されるが¹¹、いずれにせよ David が、継父となった Murdstone に苦しめられる、弱々しい女性である母親の面影を、Dora に求めたというのは推測に難くない。また、その意味でも彼の結婚は、慎重に相手を見極めることのない本能的で、衝動的な結婚であったと言える。伯母の Miss Betsey Trotwood が言うように、全く「盲目的な」結婚である。そしてそれ故に、幸福の絶頂にあったロマンティックな恋愛時代から、リアリスティックな結婚生活へ入った David は、何かが不足していることに気が付き始めるのである。

I loved my wife dearly, and I was happy; but the happiness I had vaguely anticipated, once, was not the happiness I enjoyed, and there was always something wanting What I missed, I still regarded—I always regarded—as something that had been a dream of my youthful fancy; that was incapable of realization; that I was now discovering to be so, with some natural pain, as all men did. But, that it would have been better for me if my wife could have helped me more, and shared the many thoughts in which I had no partner; and that this might have been; I knew . . . (568).

結局, "something wanting" とは, 実際には実現不可能な少年の頃の夢のようなものである。彼もはっきりとそれを自覚している。けれどももし Dora が, 自分の手助けとなり, 共通の思いを抱いてくれるような存在であれば, その憂いも解消されるであろうと, 後悔めいて考えているのである。女性には職業がほとんどなかった時代であるから (下層階級の女性, 子ども達は必ずしもそうとは言えないが), 結婚するためには, Jane Austen の小説等にもよく現れているように, 男性側にそれ相応の資力が絶対的に必要であった。しかも David は伯母が破産したために, 財産はほとんど無い状態でもある。何とか仕事はしていたけれども, それでも湯水のように浪費出来る程の立場では決して無い。故に彼としては, 妻である Dora にそういった事情を汲んでもらい, 協力を求めるのは当然といえは当然であろう。David は, Dora に自分が破産したことを告げ, 料理の本や, 家計のつけ方をマスターしてもらおうと試みるが, お金が無いという話には耳を貸そうとしないばかりか, 反対に泣いて怒り出し, 料理の本には頭痛を起こし, 家計簿を見れば泣き出す始末である。"She was a little impracticable" (441), 結局 David はこう結論づけて, 彼女に協力を求めることを諦めてしまう。夫である David に頼まれ, どんなになだめすかされても, 彼のために何とかしようという気持ちは, Dora には無いのである。ヴィクトリア朝女性の美德とされ, 家庭の主婦に求められた従順さとは, ほど遠いエゴイズム。この意味において Dora は, 自己を犠牲にしてまで従順であろうとする Agnes に対比され得るのである。しかし彼女は単に自分勝手なエゴイストであるに過ぎないのだろうか。

"Oh, but reasoning is worse than scolding!" exclaimed Dora, in despair. "I didn't marry to be reasoned with. If you meant to reason with such a poor little thing as I am, you ought to have told me so, you cruel boy!" (520)

こう自分自身で明言しているように, 確かに Dora は, 理性的な思考力を備えていない。銚を買いに行けばまるごと一匹買ってくる。働かないでどうして生活していけるのかと尋ねれば, 何とかなるわと答える。

召使い達に次から次へと好きなように翻弄されるのを、僕達には何か伝染病があつて周りの皆にどうやら感染していつているみたいだと、例えて話をすれば、そんな不健全な状態に対する何らかの医学的治療法があるのか、と本気で考え込む様子を見せる。また、病気を患うようになった Dora を、David が毎晩二階へ抱いて行つてやるのを、まるで彼が何かの賭けに負けてそうしているかのようにはしゃいでいる。これでは David と共通の考を持てる筈など到底無い。いわんや David の相談相手どころではない。そんな彼女の理性を欠いた無知なあとけなさ、それはさながら、彼女の愛犬 Jip の如くである。いや、むしろ彼女に片時も離れることなく、やがては死まで共にすることになるその犬こそは、彼女そのものを象徴しているのではないか。それは、彼女の伯母達は、「Dora が Jip を彼の分に应じて扱う如くに、彼女の分に应じて Dora を扱うということに意見を一致したようだ」という David の言葉からも窺えるが、次に掲げる引用にさらに著しい。

My poor little wife was in such affliction when she thought I should be annoyed, and in such a state of joy when she found I was not, that the discomfiture I had subdued, very soon vanished . . . (525).

"Please let me hold the pens," said Dora. "I want to have something to do with all those many hours when you are so industrious. May I hold the pens?"

The remembrance of her pretty joy when I said yes, brings tears into my eyes. The next time I sat down to write, and regularly afterwards, she sat in her old place with a spare bundle of pens at her side. Her triumph in this connection with my work, and her delight when I wanted a new pen—which I very often feigned to do—suggested to me a new way of pleasing my child-wife. I occasionally made a pretence of wanting a page or two of manuscript copied. Then Dora was in her glory. The preparations she made for this great work, the aprons she put on, the bibs she borrowed . . . (529).

まるで御主人の顔色を窺う犬さながらに、Dora は David の心を窺い、彼が苦悩にある時には意気消沈し、そうでない場合には喜びに満ち溢れている。しかし彼が苦悩にある場合に、共に苦悩を感じはするのだけでも、それを慰める、あるいは何とかしようとは思わない。いや、犬の如くに“reasoning”を欠いた彼女には、そのようには思えないのである。確かに彼女には、David の仕事の手伝いをするのが、大いなる喜びであり、彼の役に立とうとしてはいる。しかし、それは、先にも述べたように、Agnes のように、自己を犠牲にしてまでのことでは決してない。即ち Agnes のように精神的にまでの犠牲ではない。また、David 自身明言しているように、Dora の彼への仕事の手助けは、むしろ「彼女を喜ばす」ためのものなのである。しかしもし Dora が、結婚生活において David の精神的な支えとなるべく、彼の苦悩の原因を探り、そして自己を犠牲にしてまで、彼のために尽くそうとするのなら、それは彼女の持つ“reasoning”とかけ離れた本当に純粋な innocence と矛盾してしまうことになる。「自然のお気に入りの子供」(443)であり、「日常的なことで悩まされるべきではない」(443)と形容される Dora は、“child-wife”と呼ばれる如くに、子供の持つ純真さのみを備えた、「純粋で真実の魂」(463)の人なのである。このように、結局彼女は、愛犬 Jip の如くに、動物的とも言える程の innocence を持つが故のエゴイストなのである。しかしその余りに純粋すぎる innocenceこそが、一方で彼女の死へとつながることになるのではあるまいか。

III

貴族階級の出身でありながら、近代医学を発展させることによって、世界に貢献しようという高邁な希望を掲げて、医師という職業に就き、さらに、華美な世俗的成功というものが虚栄心をくすぐる都会ロンドン嫌って、医療の研究のみに没頭出来るであろう、とある地方都市 Middlemarch にやってきた理想家肌の青年、それが Lydgate である。しかしそんな彼の宿志も、忽ちにして崩される。それはひとえに、彼が Rosamond と結婚したためである。元々数年間は結婚すまいと決心していた彼だが、どうして急に結婚する気になったのか。それはよく言われ

るように、一つには「ニンフのようなほっそりとした姿態、優美な首や頬、金髪」¹²といった Rosamond の官能美に魅せられたからであろう。さらに、彼女との結婚に踏み込ませる要因となったものが、Rosamond の流す、彼を失ってしまうかもしれないという気持ちからの「自然な涙」(247)であったということから考えて、彼の持つ貴族としての優しさ、即ち "chivalrous kindness"¹³というものもあったと思われる。Dorothea の妹の Celia の夫となった貴族階級の Sir James にも、やはり女性に対して、ほほ言いなりになっているような、そういった面がよく現れている。しかし彼に結婚を決意させた最も大きな理由は、まさしく仕事と家庭を切り離して考えるようになった 19 世紀の男性の持つ、結婚への希望である。

"... I [Lydgate] feel sure that marriage must be the best thing for a man who wants to work steadily. He has everything at home then—no teasing with personal speculations—he can get calmness and freedom" (286-7).

そして彼の女性に対する希望もまた、次の引用にはっきりと表れているように、職業人としての希望、即ち、あの「従順、熱意、家庭性」なのである。

... an accomplished creature who venerated his high musings and momentous labours and would never interfere with them; who would create order in the home and accounts with still magic, yet keep her fingers ready to touch the lute and transform life into romance at any moment; who was instructed to the true womanly limit and not a hair's-breadth beyond-docile, therefore, and ready to carry out behests which came from beyond that limit ... (289).

それではその Rosamond とは一体どういう女性であるのか。

自分の息子を聖職に就かせることで、中産階級者としての対面を取り繕うことに躍起となっている工場経営者であり、Middlemarch の市長で

もある父と、宿屋の娘であったために、ことさら中産階級としての今の立場を誇示したがる母との間に生まれた美貌の娘。彼女は上流階級の女性にふさわしい、家庭の装飾品とも言える、いわゆる、‘perfect Lady’ となるべく教育を受け、貴族階級の妻になることを夢見る、両親と同じく、snobbish な女性に成長した。それが Rosamond である。そんな彼女にとって貴族階級出身という肩書きを持つ Lydgate は、結婚相手としていわば格好の獲物であった。

... by enslaving him [Lydgate] she can associate with relatives quite equal to the county people who looked down on the Middlemarchers (136).

Lydgate と Rosamond は、そうしてそれぞれに異なった互いの理想を胸に、結婚する。しかし結婚したまでは良かったが、彼らの浪費癖が祟り、家計はたちまち火の車と化し、Lydgate は大変な借金を抱え込むことになる。そんな時 David がそうしたように、夫の立場としては、妻に協力を求めるのは当然なのだが、彼女は、これまた Dora のように、現実的な努力をしようとし、ない、“impracticable” でエゴイスティックな女性なのである。

It angered him to perceive that Rosamond's mind was wandering over impracticable wishing instead of facing possible efforts (537).

いや、単に “impracticable” というだけでは無い。というのも夫に内緒で、家の競売を勝手に中止したり、夫の叔父に金を無心したりと、自らの墓穴ともなる愚策を次々と并するのであるから。そしてそれは、Rosamond が夫の心を全く理解していないという事に原因がある。もともと彼女は、「19世紀の初頭における医者 of 社会的地位は法廷弁護士よりもはるかに低かった。特に外科医には、17世紀あたりでは散髪屋を兼ねていたという印象がまだ残っていた」と J. P. Brown が語っていることから窺えるように¹⁴、当時決して上流階級に認められているとは言えない職業に就いている夫に不満を持っている。そもそもこの点におい

て、医師を最も重大な仕事であるとみなす夫と、明らかに意見を異にしているわけであり、夫を理解できる筈は無いのである。Lydgate は嘆く。

... two creatures who ... had a stock of thoughts in common, might laugh over their shabby furniture ... (573).

そうして彼らの結婚生活は、やがて破綻を来していくわけだが、妻の「非実索性」と「共通の考の欠如」に、それが起因しているという点では、David と Dora の場合と同一である。しかし、Dora の自己犠牲的でないエゴイズムが、彼女の極めて純粋な innocence に基づいているのに対し、Rosamond のそれは、上述してきた様に、明らかに彼女の生まれながらの snobbery に基づいているのである。

終章

Dickens の小説には Little Dorrit, Florence Dombey, 幼少の頃の Agnes そして Little Nell という具合に、美しく可憐な、そして G. K. Chesterton の言葉を借りるならば¹⁵、早熟の “little mother” 達が間々登場する。彼らの早熟な点、それは子供とは思えぬような自己犠牲的な愛情でもって父親に献身し、導いてやるという点に尽きるであろう。そしてここにはっきりと、作者 Dickens 自身の実体験の反映を垣間みることが出来る。即ち、債務者監獄に入牢されることになった、幾分だらしない父親 John のために、中産階級としてのプライド高く、勉学にも励みたいと願う自己を犠牲にして、靴墨工場で働き、その父を経済的に援助したという子供時代の自分自身。その体験が、彼女等に具現されているのである。つまり彼らは、作者の自己憐憫的な想いから創造された、彼自身の理想の子ども、そして理想の女性達といってよい。そんな彼らが “little mother” 達であるなら、一方、“child-wife” である Dora は、彼等の持つ早熟性に欠けた妻、ということになる。つまり先に述べてきたように、自己犠牲的献身に欠けた女性ということである。無論そういう女性は Dickens の、あるいは David の理想とする女性でないことは明白である。

しかしながら、Jip の如くに無邪気な Dora にとっての最上の喜びは、David の喜ぶ姿であり、そして最大の悲しみは彼の苦悩する姿である。そんな彼女が、David の心に次第に芽生えてきた結婚生活への “something wanting” を見逃すことは有り得ない。彼女が、夫に芽生え始めたその苦悩をはっきりと察知していることは、次の彼女の言葉からも汲み取ることが出来る。

“Oh Doady, after more years, you never could have loved your child-wife better than you do; and, after more years, she would so have tried and disappointed you, that you might not have been able to love her half so well! I know I was too young and foolish. It is much better as it is!” (627-8)

だが、彼女は夫としての彼のその苦悩を察し、またそれが今後徐々に増していくと感じはしているのだけれども、その苦悩を取り除いてやることが出来るのだとは思えない。せいぜい自分が若すぎて、無知であることに原因があるのだろうと莫然と、本能的に思えるだけに過ぎない。つまり、先に述べたように、“reasoning” の欠如した全く pure な innocence しか持たない彼女が、夫の悩みの原因を探り出して、自分に出来る限りの何らかの解決策を試みるなどということは到底不可能なことなのである。そしてここに彼女のジレンマがある。即ち、夫の苦悩が彼女にとってこの世の最大の悲しみであり、しかもそれは、自分に原因があつて、今後益々彼の失意の日々が募っていくものであろうことを感じてはいながらも、しかし、どうすることも出来ない自分自身。そのジレンマの中で彼女の健康は目に見えて衰え始めるのである。夫の癒えることのない苦悩を感じて生きて行くことは、彼女にとって死よりも辛いことなのである。彼女の体は本能的にそれを感知しているのかもしれない。そうして彼女は自らの死を予感し、それ故に Agnes に告げる。

“She [Dora] told me that she made a last request to me, and left me a last charge.”

“And it was-”

“That only I would occupy this vacant place” (708).

これこそ正に Dora の生涯で、最初にして最大の自己犠牲的精神の現れではないか。しかもそれは、自らが実際に死を迎えることによって、初めて成就されるものである。そしてこの時点で、つまり pure で innocent であった、子どもさながらの女性に、自己犠牲的な行為が生じ、Agnes との結婚という幸せに向けての David の導き手となる時点で、彼女は先に挙げた Dickens の理想としたヒロイン達と同列に列せられることになるのである。また、神とも見なされるエンジェルのような Agnes とも同一になるのである。そういえば David は最初から、恋の虜となっていたせいもあるとはいえ、Dora は「地上に住む人間とは思えない」と、しばしば言っていたのではなかったか。

一方、夫の大望を崇めることなく、常に非現実的でエゴイスティックな妻によって苦悩の日々を送る Lydgate と、そして借金生活と、姻戚となった貴族階級との事実上の決別、さらには Middlemarch 中に知れ渡った、Lydgate が、裕福な町の銀行家で、偽善的な Bulstrode に金銭で釣られて、ある患者に致命的な治療を施したかもしれないという不名誉な噂等によって、夫に愛想をつかし、会わなければ良かったとさえ願う Rosamond。しかし離婚は社会的にも、経済的にも、さらに道義的にも不可能であり、ほとんど認められていなかった時代である。即ち彼らの苦悩の日々は、自己を犠牲にして互いに妥協してやってゆくか、それともどちらかが、死によって立ち去るか、それ以外に処理すべき方法は無いのである。

“if Rosamond will not mind . . . ” (584) を、常に最優先に考えるようになった Lydgate は、最初の宿志を捨て、妻の希望通りロンドンに出て、一介の開業医となり、「愛されないと分かっているが妻を愛するように勤める」といった、そんな失意の日々を送る。“he always regarded himself as a failure . . . ” (679)。一方の妻は妻で、自分は常に夫に耐えていると思いながら、生活を送っているのである。それは全く彼女の snobbish なエゴイズムからではあるが。

... but she often spoke of her happiness as “a reward”—she did not say for what, but probably she meant that it was a reward for her patience with Tertius . . . (680).

生きて行くことは互いにとって、苦しいことではあるが、それでも互いの持つエゴイズムに耐えながら、結婚生活を送っていく。そこには作者 Eliot の “Marriage, which has been the bourne of so many narratives, is still a great beginning, as it was to Adam and Eve . . .” (677). とする人生観、即ち、苦しい結婚生活、その中にも何らかの意義を見いだそうとする、現実を見据えたリアリスティックな態度が表れていると言える。非常に深い愛情で結ばれていた父と娘であったにもかかわらず、友人たちの影響でいわゆる ‘honest doubt’ に捕らわれ、彼女のリアリズムの源泉ともいえるあくなき真理追求の態度でもって、キリスト教に疑いを抱き始めた Eliot は、父と一緒に教会へゆくことを執拗に拒否することとなる。そしてそれ以後彼らの関係が完全に修復されることはなかった。そんな筆者自身のエピソードに見いだされるように、作中人物達と同様、実際自分自身の中にも、かなりエゴイステックな内面を持っていた彼女は、一生を通じて、その自身のエゴイズムに苦しまなければならなかった。しかしそれに耐えて行くのがいわば人生であると見なしていたのでもある。一方、晩年とも言える五十代になってからでも敢えて、長年連れ添った妻と離婚に踏み切った Dickens。そんな彼は常に理想を求める究極のロマンティストと言えるのである。そのそれぞれに異なった彼らの人生観が、死によって理想的な女性となった Dora と、自分のエゴイズム故に苦しみながら生きて行く Rosamond にそれぞれ反映されている。Dora という女性を人生の最大の目的として求めた David のロマンティシズム。いわば生活の手段として Rosamond を求めた Lydgate のリアリズム。そういった点にも両作家の異なった視点が窺えるのではないか。死に行く Dora に生き抜く Rosamond、そこにはヴィクトリア朝を代表する両作家の、いわば自分自身の人生といったものが、浮き彫りにされていると言えるのかもしれない。

注

1. F. R. and Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist* (London: Chatto & Windus, 1970). p. 106.
2. Arlene M. Jackson, “Agnes Wickfield and the Church Leitmotif in *David*

- Copperfield*," *Dickens Studies Annual*, 9 vols (New York: AMS Press. Inc.), p. 53.
3. Charles Dickens, *David Copperfield* (Oxford Univ. Press, 1991), p. 569.
以下同テキストからの引用は本文中の括弧内に記す。
 4. Patricia Thomson, *The Victorian Heroine* (London: Oxford Univ. Press, 1956), p. 10.
 5. 松村昌家『ヴィクトリア朝小説のヒロイン達』(創元社, 1988), 9頁。
 6. George Eliot, *Middlemarch* (Oxford Univ. Press, 1990), p. 42
以下同テキストの引用は本文中の括弧内に記す。
 7. J. Hills Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1958), p. 157.
 8. F. B. Pinion, *A George Eliot Companion* (London: The Macmillan Press Ltd., 1981), p. 197.
 9. George H. Ford and Lauriat Lane, Jr., *The Dickens Critics* (New York: Cornell Univ. Press, 1961), p. 352.
 10. Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970), p. 214.
 11. Jackson, p. 62-3.
 12. 和知誠之助『ジョージ・エリオットの小説』(南雲堂, 1974), 163頁。
 13. Pinion, p. 196.
 14. J. P. ブラウン (松村昌家訳)『十九世紀イギリスの小説と社会事情』(英宝社, 1987), 109頁。
 15. G. K. Chesterton, *Charles Dickens* (Tokyo: Kenkyusha, 1932), p. 95.

The Absence of Mother and Pip's Mental Deadlock in *Great Expectations*

Kazuho Yoshida

SYNOPSIS

The purpose of this paper is to propound the view of the psychological presentation of Pip, the hero of *Great Expectations* (1860-61). Although there is fairly general agreement that Pip is a symbol of Victorian materialism and acquisitiveness, it remains an unsettled question how the absence of a mother in Pip's life affects not merely his mental development and the attainment of his ambitions, but also his attitude to life as a whole. This paper discusses how Pip, the motherless orphan boy, misleads himself in his progress towards his "great expectations" until all his illusions are finally lost. The subject of Dickens's symbolic descriptions also comes within the scope of this paper.

1.

In *Great Expectations* (1860-61), Dickens is more concerned with the hero's mental world and the presentation of disillusionment than the pattern of the successful career of an orphan hero. The title of *Great Expectations* is implicitly ironical, and Pip, the hero, is certainly intended to be an ironical or revised version of David Copperfield who attains a happy life through his success as a writer. On the contrary, although Pip takes a wait-and-see attitude to the world from the very beginning, he longs to be a gentleman, and unconsciously and ironically strays into a long series of illusions in his progress to maturity. Many critics attach greater importance to Pip as a symbol of Victorian materialism and acquisitiveness¹ and Dickens's intention to describe

such an individual in the Victorian age than to the psychological presentation of Pip, but Pip's mental world must be considered first of all; it is deeply connected with his subconscious mind. The term "subconscious mind" has its origin in the psychology of Freud and Jung, and the fact that the subconscious mind controls a person's life is now widely accepted.

David is positive in his life and has his own philosophy of success: "there is no substitute for through-going, ardent, and sincere earnestness,"² while Pip is negative in his and always in constant fear of loss. Obviously, Pip's sense of guilt is stronger than David's, but there is not a great difference between Pip's guilt and David's, not only in reasons and motives, but also in what they actually do. Edwin M. Eigner insists that from as early as *Oliver Twist* (1837-39) Dickens's vision had been a dark one, and that his heroes had always had a sufficient load of guilt to deal with. He continues:

Pip's guilt, for instance, is not sufficiently greater than that of, say, David Copperfield, who introduced the seducing serpent into the closest thing he had ever known to Eden, and who wished his first wife to death because she did not suit him.³

Eigner goes too far in saying that David "wished his first wife to death," but his observation about the feelings of guilt in Pip and David is to the point, because these come from their egoism. No doubt Pip is egoistic in that he falls short of Joe's expectation for Pip to work as a blacksmith, accepts a beneficial offer, and comes to loathe and finally betrays Joe, his benefactor, until all his illusions are finally lost. The reason why Pip does not achieve success not in his mental development but in his worldly desires is open to question. Although Pip and David are both egoists, there is a decisive difference between them. It is that David is positive in his subconscious mind while Pip is negative in his. In the first place, one thing is certain: David had his mother in his

birthplace and had memories of his time with her while Pip did not have his, and never even saw any likeness of her. It has a great effect on the relative stability of their mental states in relation to their birth. Such being the case, David is positive in his life, and the emotional mainstay of his mother encourages him and is the wellspring of his activity, while Pip is negative in his life without his mother.

Dickens had a bitter experience with his own mother: she was against the plan that he would be released from the blacking factory, and tried to keep him there. Dickens unconsciously reveals his conviction that maternal love is important in his characterization of Pip, although he tries to describe a symbol of the age. The absence of a mother in Pip's life is also influential in his personal relations and his view of women. His all-powerful sister, who, "in her capricious and violent coercion, is unjust to him"⁴, has no intention of extending a helping hand to him, so that he has no choice but to make an approach to cold-hearted Miss Havisham who lives in the hope of exacting a revenge on men in general by bringing up Estella as a cold and cruel heart-breaker.

On the other hand, Pip has complete trust in Joe; Joe has the responsibility of being not only Pip's father but also his mother. Joe is a warm-hearted man, is hard on himself, and has many virtues which Robert Barnard thinks of as Christian virtues⁵; Joe is exactly the opposite of Miss Havisham in his way of life. He works and saves money steadily. The sounds of Joe's hammer as a sound effect by Dickens touch human hearts, make people who live disregarding the rules by God suffer qualms of conscience, and make us remember Joe's role in the pursuit of Pip's fugitive friend, in chapter five.

Joe is an incarnation of Jesus Christ, who chose the Twelve Apostles, but was temporarily doubted, abandoned, and betrayed by them after the Crucifixion. We can see a similar pattern in Joe's fate. Dickens shows us Christianity by bringing out the contrast between Joe and Pip. Joe trusts Pip, who is tasting the forbidden fruit by falling in love with Estella despite her disdain for his coarse hands and thick boots, as an

apprentice of a blacksmith. However, Joe is forsaken, looked upon as a nuisance during his visit to Barnard's Inn, and finally betrayed by Pip himself. Nevertheless, Joe does not take revenge on Pip who deserves reprisal for his betrayal, gives Pip undivided attention when Pip is sick in bed, and devotes himself to payment of all of Pip's debts. Entirely unaware of such a future, in the early stages of Pip's development, Joe gives him some lessons: "Don't you tell no more of 'em(lies) (65): "If you can't get to be on-common through going straight, you'll never get to do it through going crooked" (66). He is not a scholar but a wise man, as Bert G. Hornback suggests⁶; he lives up to his principle that the knowledge must be allied to goodness and wisdom, and embodied in upright character, else it is naught, and that it is pleasant to work hard rather than to get wealth in an idle life.

Although his morality and ethics leave nothing to be desired, Joe cannot give Pip anything like the relationship between mother and baby created by physical contact. Physical contact with a mother gives a baby the awareness of his identity and fitness to be loved through her sensation of warmth and a sense of security, so that the person can be basically positive in his or her life. William F. Axton insists that "Pip's social ambitions are identical with his moral and emotional goals: a way of life that not only transcends the limited human condition but that denies it."⁷ Most of us would accept his remark, but it is doubtful how the absence of mother has an effect on Pip in comparison with the case of David. David also transcends the limited human condition but he more easily denies it than Pip does, because David is always protected by the memory of his mother's love. David tells us what led him from Murdstone and Grinby's to Betsey Trotwood: "But under this difficulty, as under all the other difficulties of my journey, I seemed to be sustained and led on by my fanciful picture of my mother in her youth." (188) David does not adhere to the past but readily adjusts his ways of living to the present, while Pip cannot learn to turn adversities into advantages. Pip no longer has a longing for a gentleman again

after all his illusions are finally lost and the fact makes him an adult. Pip's ultimate object is not to be a gentleman but to get maternal love, because in his mind Pip hopes for Biddy's maternal love before he goes down to the birthplace. Pip's desire for a gentleman is his desire for acceptance. Viewed in the light of complete trust to mental cradle in infancy, it is more difficult for Pip to bear many hardships; his mentality finally comes to a deadlock.

2.

Let us now attempt to extend the observation of Pip's mental world into his unconsciousness. After he sees *Hamlet* and returns to Barnard's Inn with Herbert and Mr. Wopsle, he has a nightmare.

Miserably I went to bed after all, and miserably thought of Estella, and miserably dreamed that my expectations were all cancelled, and that I had to give my hand in marriage to Herbert's Clara, or play Hamlet to Miss Havisham's Ghost, before twenty thousand people, without knowing twenty words of it. (244)

The dream testifies to Pip's fear of his expectations, love, knowledge and mysterious guardian. It has significance when we give Pip's unconsciousness more consideration; Wopsle and he come from the same part of the country and adapt themselves to London. Therefore, Pip feels a sense of closeness to Wopsle, but Wopsle commits a blunder in *Hamlet*. He acts against his nature which has been made in his birthplace. Pip is unconsciously aware of it and is filled with apprehension that he may be in such a great difficulty himself.

Sigmund Freud (1856-1939) expounded the oedipus complex based on the relation between father and son with special emphasis, while Carl Gustav Jung (1875-1961) thought that the supply of mental energy from a mother helped the formation of a boy's ego; her love is absolute and

largely unconditional. Freud explored the problem of the relationship between father and son. At a very early age a little boy develops an object-cathexis for his mother, which is originally related to the mother's breast and the prototype of an object-choice on the analytic model; the boy deals with his father by identifying himself with him. For a time these two relationships proceed side by side, until the boy's sexual wishes in regard to his mother become more intense and his father is perceived as an obstacle to them; from this Oedipus complex originates.⁸ Jung emphasized the biological basis of infant-mother bond designating it "the absolute experience of our species, an organic truth as the relation of the sexes to one another."⁹ Freud's thought has been considered to take father (=culture) very seriously and Jung's to be one which regards mother (=nature) as important.

The relation between father and son holds a great position in Pip's psychology, because after all, Joe performs his duties not as Pip's mother but as his father. Joe teaches Pip how to live in the culture of a hierarchical society and the forge is indeed a moving image of work as A. O. J. Cockshut suggests.¹⁰ Pip is forcibly steeped in the false sense of values and the class consciousness of the world of Miss Havisham and Estella by his contacts with them, but it is Joe who makes the foundation of Pip's psychology. Consequently, Pip can get along with men as models in society rather than women. In the novel, the relationship between father and son is the driving force behind society, although the relationship between Joe and Pip is not blood one. Joe is good enough to overlook Pip's betrayal and says: "Pip, dear old chap, life is made of ever so many partings welded together, as I may say, and one man's a blacksmith, and one's a whitesmith, and one's a goldsmith, and one's a coppersmith. Divisions among such must come, and must be met as they come." (212) Joe accepts his relation to Pip in the different position of the society and humbly discharges his duty as a blacksmith. In *David Copperfield*, Dickens's idea that a father shapes a social part of his son, has already been reflected in the

character of Steerforth. Steerforth does not have a good sense of direction of himself in the society because of the absence of father, as Steerforth himself asserts that it is true; he tempts Emily to elope with him and brings about his ruin because of his overestimation of the importance of money, his superficial gentlemanliness, his lack of humane heart and of the virtues of a gentleman. As stated above, what it amounts to paradoxically is that Dickens is obsessed with the idea that the relationship between father and son is the propulsive power behind the society.

In strong contrast to the relationship between father and son, the cruel treatment by his hysterical sister "embittered by the frustration of her social expectations"¹¹ makes Pip have a negative impression of women in his unconsciousness, and, as a result, his love is distorted. Pip tries to get closer not to Biddy who really loves him but to Miss Havisham and Estella who ill-treat him, because he feels forced to go through the great hardships of his infancy again.

In the novel, mother's love is indispensable for the healthy development of the adult personality. Pip says to Estella, who lacks her own mother's love and never believes in his love, "Surely it is not in Nature" (343), but she returns, "it is in the nature formed within me." (343) Their conversation demonstrates that Estella, who has not enjoyed her mother's love and has been a victim of Miss Havisham's revenge plan, lacks humanity. Pip has also been a victim of Estella, a substitute for his sister, and says:

You have been the embodiment of every graceful fancy that my mind has ever become acquainted with. The stones of which the strongest London buildings are made are not more real, or more impossible to be displaced by your hands, than your presence and influence have been to me, there and everywhere, and will be. Estella, to the last hour of my life, you cannot choose but remain part of my character, part of the little good in me, part of the evil. (345)

As Pip himself says, his mind is ruled by Estella, and he also lacks humanity. Accordingly, the attainment of goals is difficult and he unexpectedly has the dream that his expectations in relation to Miss Havisham's world of desire, guilt, and cold-heartedness, are all cancelled; that Clara suits him rather than cold-hearted Estella; and that he lives above his nature and is to be a sacrifice on the altar of Miss Havisham's revenge plan. (Hamlet takes revenge on his uncle, Claudius, for the murder of his father in the play, and dies.) Liliane Frey-Rohn wrote that, according to Jung, the dream was specifically the utterance of the unconscious, and Freud referred to compensating activity by mentioning that wish-fulfillment in dreams appeases the psyche.¹² While Pip endeavors to discover his true nature, he ironically feels the importance of her existence in his life, when he learns about death of his sister.

It was the first time that a grave had opened in my road of life, and the gap it made in the smooth ground was wonderful. The figure of my sister in her chair by the kitchen fire haunted me night and day. (246)

The description gives evidence that Pip's unconsciousness has been occupied by his sister, who, we can think, gave him a negative view of life. As he walks along in summer weather, he remembers the time when he was a little helpless creature and his sister did not spare him. His helpless mind goes from bad to worse through the bitter memory of his time with his sister, which taught him a false sense of value.

Pip consequently seeks not love but class and money. Biddy is quite considerate to him but does not satisfy his hunger for love completely. He is smeared with a false sense of values in Miss Havisham's world and tries to make up for the loss of his love by the money Jaggers gives but it cannot help Pip out of the loss. Jaggers has a firm belief in his philosophy: 'Take nothing on its looks; take everything on evidence.

There's no better rule.' (317) He attaches greater importance to logic than to emotion; it was by her emotional attachment to Compeyson that Miss Havisham's heart has been broken.

That mother's love appeals to emotion rather than to reason, is the point to be considered; Pip lacks expression of his feelings in the absence of mother's love. He has a narrow escape from perfect loss of expression of his feelings thanks to Joe and Biddy in his birthplace, who have respect not for logic in hierarchical society but for individual emotion; but they can not erase Pip's bitter memory. T. A. Jackson declares that the logical consequence of Pip's delusion about his "great expectations" is not only the shock of disillusionment—and loss of his fortune along with his real benefactor—but also the frustration of all his love expectations.¹¹

John P. MacGowan gives an account of why David is infatuated with Dora, with the help of Jacques Lacan. The French psychoanalyst Jacques Lacan has noted the movement from object to object in the "chain of desire," each object existing as a substitute for (as a signifier of) the original lost object, generally the mother. For Lacan, repetition is both inevitable and impossible: inevitable in that we always focus our desires on objects which recall the original object: impossible because the original object will never return and never be replaced. This movement of desires is precipitated by our continual reinterpretation of our desires; only the ability to revive our desires moves us from one to another. Neurosis is defined as obsessive fixation on a particular object, as acute nostalgia. By this definition, McGowan thinks that, David's love for Dora is neurotic.¹⁴ Lacan's theory also holds in the case of Pip. The loss of Pip's fortune and his frustration originally arises from the absence of mother and his mentality as a result of his sister's treatment. Pip undergoes it again in every kind and degree of torture that Estella can cause him. Satis House results in exactly the opposite of our expectations with regard to the name. It is a symbolic building of cold-heartedness and despair, and the cobwebs in Miss

Havisham's room make us think of Drummle's trap; Drummle, "the spider", is a representative of egoism, a strong feeling of attachment to money, and carnal desires, and personifies the bad side of Pip. Drummle is evil itself, and Satis House has been reduced to its dilapidated state by evil hearts. Satis House does not give a sense of satisfaction either to Pip or to Estella. Although Pip's repugnance to Magwitch, Estella's father, all melts away when Magwitch holds Pip's hand in his, in chapter fifty four, Pip cannot get a sense of satisfaction. If we search for a cause of this want of satisfaction, we need look no further than the absence of mother figures in both their lives. "Estella is set to wreak Miss Havisham's revenge on men" (288), and "is stock and stone" (289). Pip and Estella, whom Dickens drew as victims of a capitalist and materialistic society, unconsciously feel the want of their mother's love and try to compensate for it with class and money, but, in spite of their determined efforts to compensate for the deprivation, in the final analysis they are unsuccessful. They unconsciously reach a mental deadlock in love. That Estella is Magwitch's daughter leads the plot to the resolution. Although it is Dickens's attack for a person who seeks not love but class and money, there seems little reason to explain Pip's psychology plainly.

3.

We come now to the point at which it is necessary to deal carefully with the subject of Dickens's symbolic descriptions of Pip's birthplace and London. It has provoked a great deal of controversy. The existence of Pip's birthplace comes to weigh with him, when Pip first comes to London. Before he leaves his birthplace, he thinks of the blacksmith and London as 'innocence and experience' or 'the country and the city,' and he feels that he is set free and London is great when Joe and he put his indentures into the fire and he is released from his contract. Pip expected London to give him freedom and impression of greatness,

but London disappoints him as he finds Barnard's Inn not to be "an hotel kept by Barnard," (162) but to be "the dingiest collection of shabby buildings ever squeezed together in a rank corner as a club for Tom-cats." (162) Therefore, Pip does not feel that he has discovered freedom and greatness, although he is a long way from his birth place. In this case, the degree of freedom and greatness in Pip is represented by visible concrete buildings. It is Dickens's symbolic description; the state of Barnard's Inn shows at once its actual condition and that Pip feels neither mental freedom nor any sense of greatness.

Barnard's Inn gives us an image of "deadlock" and a typical example of the image is Newgate. Elloit L. Gilbert suggests:

At home, there is the Satis House, in which Miss Havisham has self-indulgently locked herself away, and in London there is Newgate, representative of all the greed and egotism and violence that comprise Little, rather than Great, Britain.¹⁵

Gilbert regards the Satis House as Romantic prison of the secret life, and, Newgate as the Victorian prison of materialism.¹⁶ Most of us would accept his statement if we thought Dickens had intended to depict only social conditions through describing those buildings. However, we should not ignore Pip's mental state, and one can safely maintain that Dickens also tried to represent it by those buildings.

This will lead us further into a consideration of a descriptions of Pip's birthplace. It is marsh country and there is a "dark flat wilderness beyond the churchyard; the low leaden line beyond is the river; the distant savage lair is the sea." The marshes themselves, and river and the sea beyond them, as Colin N. Manlove supposes, seem the most solid entities in the story, even while their nature is to suck in or drown life.¹⁷ There is much justice in his view, because the marshes, the rivers and the sea are suggestive symbols that in his future Pip will be distressed in the false sense of values and complicated human relations

arising from it. There is, however, one point of which we cannot make light. It is not only that Pip's birthplace does not contain the memory of his mother as she lived, but also that it is the site of grave which provides an image of "death". Therefore, Pip feels something is missing there. It is the existence of his mother and a sense of security of his life, and what is even worse, he cannot give vent to his emotion because he has never entrusted himself to a mother's absolute love. There is a great similarity between London and Pip's birthplace in the descriptions of them. They both suggest an image of "deadlock". As David M. Craig acutely pointed out, *Oliver Twist*, *David Copperfield* and *Great Expectations* present striking similarities in their presentations of London and of urban life. He suggests that "Oliver's physical imprisonment in Fagin's lair becomes David's entrapment in Dickens's blacking house memories, which, in turn, becomes Pip's psychological entanglement in his own guilty consciousness."¹⁸ Dickens tried to represent, not only London which gives us the image of Pip's consciousness of guilt, but also London as the image of "deadlock" coming from the absence of Pip's mother and Dickens's bitter memory with his mother. We had also seen the image in the description of Pip's birthplace; Dickens's confinement in his unconsciousness and his complications that he has not come out of the shell of his depressed mental state as a result of his mother's treatment of him, are part of the description.

In *The World of Charles Dickens* (1970), Angus Wilson writes that *Great Expectations* has no direct connection in its story with Dickens's own life, and it is only in the character of Estella that critics have seen, perhaps justly, some reference to Ellen Ternan's coldness towards Dickens's passion.¹⁹ He may well write so because there are few definite grounds for finding a direct connection between the story and Dickens's own life. However, when we give careful consideration to Pip's psychology, we can make the great discovery that Pip wants his mother's love and that the condition in his mind becomes worse

because of the treatment he receives at the hand of his half-mad sister and from Estella whom Miss Havisham has created.

Dickens's descriptions of London and Pip's birthplace give us the image of "deadlock", providing evidence to prove that we cannot ignore the absence of a mother figure in Pip's life and its influence in the novel. Lacan lays stress on the importance of the unconscious which Freud explained. Freud psychoanalyzed patients from their words to try to discover what was happening in their unconscious minds. The approach of this paper has been to psychoanalyze Dickens from the evidence provided in his symbolic descriptions to learn something of his unconscious mind.

Notes

1 Susan Schoenbauer Thurin, "The Seven Deadly Sins in *Great Expectations*," in *Dickens Studies Annual*, 15, ed. Michael Timko, Fred Kaplan, and Edward Guiliano (New York: AMS Press, Inc., 1986), p. 201.

2 Charles Dickens, *David Copperfield* (The Oxford Illustrated Dickens, New York: Oxford U.P., 1989), pp. 606-7.

The following citations from the same book are indicated in parenthesis by page numbers.

3 Edwin M. Eigner, "The Absent Crown in *Great Expectations*," in *Dickens Studies Annual*, 11, ed. Michael Timko, Fred Kaplan, and Edward Guiliano (New York: AMS Press, Inc., 1983), p. 116.

4 Charles Dickens, *Great Expectations* (The Oxford Illustrated Dickens, New York: Oxford U.P., 1992), P. 12.

The following citations from the same book are indicated in parentheses by page numbers.

5 Robert Barnard, "Imagery and Theme in *Great Expectations*," in *Dickens Studies Annual*, 1. ed. Robert P. Partlow, Jr. (Southern Illinois University Press, 1970).

6 Bert G. Hornback, "*Great Expectations: A Novel of Friendship*," (Boston: G.K. Hall & Co., 1987), p. 60.

7 William F. Axton, "*Great Expectations Yet Again*," in *Dickens Studies Annual*, 2, ed. Robert B. Partlow, Jr. (New York: AMS Pressz, Inc., 1980), p. 282.

- 8 Sigmund Freud, *The Essentials of Psycho-Analysis*, (Penguin Books, Sigmund Freud Copyrights Ltd. 1986) p. 455.
- 9 Anthony Stevens, *On Jung* (Harmondsworth: Penguin Books, 1990), See, in particular, *The Collected Works of C. G. Jung*, vol. 8, paragraph. 723
- 10 A. O. J. Cockshut, "Great Expectations," *The Imagination of Charles Dickens* (London: Collin Clear-Type Press, 1961), P. 166.
- 11 William F. Axton, op. cit. p. 280.
- 12 Liliane Frey-Rohn, *From Freud to Jung* (New York: Walter Verlag AG, Olten, 1969) pp. 231-40.
- 13 T. A. Jackson, *Charles Dickens: The Progress of a Radical*, (New York: International Publishers, 1938), p. 194.
- 14 John P. McGowan, "David Copperfield, The Trial of Realism," in *Nineteen-Century Fiction* 34, no. 1. (1979): rpt. in Charles Dickens's *David Copperfield*, ed. Bloom, Harold (New York: Chelsea House, 1987), p. 83.
- 15 Elliot L. Gilbert, "In Primal Sympathy": *Great Expectations and the Secret Life in Dickens Studies Annual*, 11, ed. Michael Timko, Fred Kaplan, and Edward Guiliano (New York: AMS Press, Inc., 1983) p. 95.
- 16 Ibid., p. 95.
- 17 Colin N. Manlove, "Neither Here nor There: Uneasiness in *Great Expectations*" in *Dickens Studies Annual*, 8, ed. Michael Timko, Fred Kaplan and Edward Guiliano (New York: AMS Press, Inc., 1980) p. 67.
- 18 David M. Craig, "The Interplay of City and Self in *Oliver Twist*, *David Copperfield*, and *Great Expectations*" in *Dickens Studies Annual*, 16, ed. Michael Timko, Fred Kaplan, and Edward Guiliano (New York: AMS Press, Inc., 1987) p. 19.
- 19 Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970), p. 271.

When I was writing this thesis, I was greatly indebted to Professor Matsumura, Mr. David W. Rycroft, and Mrs. Jacqueline Banerjee, who have kindly spared time to give me advice for this paper. Thanks are due to the editorial staff members for helpful suggestions.

The Temple of My Familiar

— 調和による未来の模索

中野 淑子

SYNOPSIS

Alice Walker calls her book, *The Temple of My Familiar*, a romance of the last 500,000 years. Before she wrote this novel, the themes of her novels were racism, sexism and feminism, but here she adds another motif, anxiety about the future.

Two young couples and an old couple appear in the novel. Seemingly, they lead happy lives but they have respective problems and struggle to find the way to happiness. By experiencing various incidents, they suffer and then come to realize that they need harmony. Their help with each other and also the help of Lissie, who transmigrates many times and has experiences of many lives, make them open their hearts and face the facts. Walker tells us that if we have harmony with all the creatures in the world, we can protect the earth from the ruin.

Alice Walker の最初の二つの小説, *The Third Life of Grange Copeland* と *Meridian* の中に書かれた女性達は女性であり黒人であるという二重の重荷を背負い, 社会でまた家庭の中でさえ, しいたげられている人々である。Gayle Jones は次のように指摘する。"And many of the women in Walker's early works become what the men imagine them to be: it is a frequent theme in black women's fiction."¹ しかし, *The Color Purple* の Celie は小説の終りには立派に自己変革をとげた女性として独立する。

The Color Purple を書いた後に, Walker は読者の厳しい批評に苦しんでいた。その間, 彼女は先祖や知らない人々の夢を見た。彼等は彼女の作品を褒め, 書き続けるように励ましてくれた。"The old ones/visit me/in dreams/to thank me for/*The Color Purple*;/They tell

me./Daughter, it's/the best/you've ever done./I can't tell you/how many rough/old hands/I've shook.² この詩を書いて Walker は人々は決して先祖から切り離されてはならないと考え、次の作品 *The Temple of My Familiar* には先祖や霊が登場する。

If we kill off the sound of our ancestors, the major portion of us, all that is past, that is history, that is human being is lost, and we become historically and spiritually thin, a mere shadow of who we were on the earth.³

The Temple of My Familiar には *The Color Purple* のヒロインである Celie の孫娘の Fanny や、Celie が自己尊厳の気持を取戻し自立するのに大きな力となる Shug も登場し、*The Color Purple* の中で問題をもった Fanny は *The Temple of My Familiar* で更に展開している。例えば、*The Color Purple* の中で Walker は Nettie のアフリカ布教に関連して環境破壊の問題を取上げている。更に Walker は *The Temple of My Familiar* の中でこれをもっと身近な深刻なものとして、この地球を破滅から救うためには我々は調和（ハーモニー）をもたなければならないと訴えている。その調和をもつために人々は何をすべきか、また Walker の将来に対する展望はどのようなものなのだろうか。

The Temple of My Familiar には二組の若いカップルと、一組の年取った夫婦が登場する。若いカップルのうちの一組である Suwelo と Fanny は離婚の危機に立っている。彼等の間にある問題は、第一に Suwelo には Fanny と調和を保って生きていこうという姿勢が見られないことである。Fanny は彼に Bessie Head の本を読むようにすすめるが彼は Fanny に推薦された本を読む気持もないし、女性作家によって書かれた本を読もうとも思っていない。彼はその本を読んでも読まなくてもそれは彼等の関係には何の影響もなく、共通の興味をもつ必要もないと考えているのである。その上、Fanny は彼の支配のもとにあるべきだと思っている。第二に彼等が東部に住んでいた時のエピソードであるが、彼女がショッピングに行くためにカートを買ひ、それを Suwelo に使うようにすすめた時、彼はカートを使うのを拒絶した。何故なら彼にとっ

てカートは女性に属した物であり、それを使うことによって女性と同等でありたくないという気持を持っているからである。第三に Baltimore へ行く途中に読んだ本の中の男性が女性を性の快楽の対象であり、彼等の所有物であると考えているのに対して批判しているが、Suwelo 自身が Fanny や Carlotta を本の中の男性がしているのと同じように取扱っていることに気付いていないのである。彼は無意識のうちに女性蔑視の気持で Fanny に接し彼等の間の調和はなくなっているのである。

Oh, they had many delicious meals together after that. But it was never the same. There had been a little murder, there in their bright, homy kitchen, where, up until that time, they'd both felt light, free, almost as if they were playing their roles. The cart disappeared, and Suwelo felt terrible about the whole episode.⁴

一度殺されたものは生き返ることは出来ない。カートの出来事からしばらくして Suwelo は夢を見る。彼はスーパーマーケットへ行っても多くの買物をするが、それらの物を家に持って帰るためのカートを持っていない。“There he stood in the Great Supermarket of Life, cartless, with pockets that wouldn't hold a penknife” (164). Suwelo はこの時、女性を無意識のうちでも蔑視していたことを後悔したに違いない。カートと共に失ったものは二度と戻ってこない。以前 Suwelo が拒絶したカートはその仕返しとして今度は彼を拒絶して打ちのめすのである。

Suwelo のもう一つの問題は彼の両親についてである。それは余りにも苦しい思い出のため、彼は心の扉を閉じて思い出さないようにしているのだ。第二次世界大戦中 “he [father] has lost half of one arm and all of his mind” (402). Suwelo はそのような父を憎み、まら父と離婚しない母を憎んでいる。彼は Arveyda と Zedé についての話を Carlotta から聞いた時 Lissie のテープを思い出すのである。

He and I felt you have closed a door, a very important door, against memory, against the pain. That just to say their names, 'Marcia' and 'Louis,' is too heavy a key for your hand. And we

urge you to open the door, to say their names. To speak of them, anything you can remember, freely and often, to Fanny. To trace what you can recognize in yourself back to them; to find the connection of spirit and heart you share with them, who are, after all, your United Front. For really, Suwelo, if your parents are not present in us, consciously present, there is much, very much about ourselves we can never know. (352-53)

Suwelo は心の扉を開き両親が部屋の中に入って来て、彼等の間の和解が成立したのである。Suwelo は今や調和をもって世の中を生きていく用意が出来たのだ。

一方 Fanny の方も調和をもって生活出来ない問題を抱えているのである。彼女は Suwelo と離婚したいと願っている。しかし彼女は、"I don't want to end our relationship; I want to change it. I don't want to be married. Not to you, not to anybody. But I don't want to lose you either" (139) と言い、また "I want to enjoy you, to love you, to confide in you, to be your friend" (139) と言うのである。彼女は自分のしたいことだけをして、夫にどれだけ迷惑をかけているのか考えてはいないのだ。彼女はそれが自由であると考えていて、自由と言うものは調和と共に得られるものであるということに気付いてはいない。

Fanny はまた、何故自分が暴力や差別に対して激しい怒りを、そして白人に対して憎悪を感じるのかを知るために精神分析医にかかっている。彼女には少女の頃 Tanya という友達がいた。Fanny の家族より貧しい白人のその家族は Fanny の家でおいしい食物や彼等の才能を妬み、彼女と Tanya を一緒に遊ばせないようにした。Fanny はこの不当な拒絶を忘れるようとしても忘れることが出来ず、白人に対する怒りが無意識のうちにより大きく、強くなっていったのである。Fanny は自分の想像の中で白人をナイフで切る。彼女は暴力で彼等に仕返しをしようとするのだ。しかし彼女は自分が本当に暴力を振わないかと恐れて、この世の出来事から目をそむけて過去の霊と調和ある関係をもとうとしているのである。

The Color Purple の Celie も同じ悩みを持っている。彼女は Albert が Nettie からの手紙を彼女に渡さなかったことを知ると剃刀を手を持つ。

しかし彼女はそれを使う代りに針を手につつのである。Mae G. Henderson は次のように指摘する。“With ‘a needle and not a razor in [her] hand’, Celie channels her anger and violence into creativity. Later, in Memphis, Celie’s skill with the needle and her talent for designing pants provide her with the means of earning a comfortable livelihood.”⁵ Celie は殺人者になることから解放され、同時に自立した女性実業家になる。彼女が大人になった後すべての人にやさしくするが、ただ彼女の犬に対してだけは残酷な仕打をする。彼女は悲惨な少女時代を過ごしており、そのかくれた残虐性はそのような彼女の経験から出てきているのである。Shug が Celie に強くなるように励まし、Sofia がどのようにして男性、差別そして不当な取扱に立ち向うかを教える。しかし独立した女性実業家になった後でさえも Celie の中には復讐したいという気持ちが残っていて、許すということがどれ程難しいかということを示している。

Suwelo と Fanny は二人共自分勝手に、したいことだけをしているように見える。しかし、言い換えれば彼等もまた、人種差別や性差別の犠牲者でもあるのだ。二人は別れて暮らす、そのうちに別離は彼等の間の距離を大きくするものではなく、逆に調和をもたらしものであることを知る。そのため彼等は離婚した後も共に暮らすことが出来る。我々が暴力の犠牲者となった時にそれに対応する方法は彼等を許すか、又は戦うことである。Walker は我々に暴力をふるう人は無知であり、愛のない子供時代を過ごした人であるから同情すべきであると言っているのである。もし我々が復讐として暴力で立ち向ったとしたら、暴力はいつまでもくり返される。彼等を許すことによって我々は調和を保ち平和に暮せるのだと。

もう一組の若いカップルの Arveyda と Carlotta の結婚も Arveyda と Carlotta の母の Zedé が愛し合ったために破局に終る。Carlotta と子供達は残され、傷ついた Carlotta は Fanny のマッサージパーラーへ姿を現わし、彼女は Carlotta の痛みの激しさに驚く。“She [Carlotta] was small, but as dense and as heavy as lead. I [Fanny] knew the body of the woman you [Suwelo] said had no substance. Carlotta’s very substance was pain” (320). しかし、辛い経験をした Arveyda と

Carlotta はこの小説の終り近くになって夫と妻としてではないが一緒に暮らすようになる。二人はそれぞれの調和のとれた方法を見つけるのである。

年取った夫婦である Hal と Lissie は子供の時からの友達だ。二人の間の関係は普通の夫婦と反対である。Hal は言う。“She [Lissie] was never no angel” (42) “She was a born ring-leader” (43). 一方 Hal は父の命令に逆うことの出来ない男なのだ。彼の画家になりたいという願望が父によって打砕かれた時、彼の中で何かが死んでしまっ、彼は肉体的にも精神的にも視力を失うのである。Lissie はそのような彼を支えて守る役目を果す。夫婦の間で夫と妻の役割が反対になり、その方が夫婦の関係がうまくいくというのは自己変革後の Celie と Albert の関係に類似している。Hal は白人を憎悪しているが、それは彼の少年時代の辛い経験からきているのである。彼の父は白人にホモセクシャルの関係をもたされ、彼は “had been treated like a woman” (137) と “the way he had responded” (137) という理由のためますますその関係を嫌った。そしてその堪えきれない感情の捌口を Hal の画家になりたいという願望を拒否することに見出したのだ。

Suwelo は Hal と Lissie に Uncle Rafe の友達として Baltimore で合う。何回も生まれ変わって 500,000 年を生きてきた Lissie はその前世での経験を Suwelo に話して聞かせる。彼はそれらの多くの物語を聞くことによって心を開き、いろいろの問題を彼女に相談し、それらを解決する大切な手がかりを見つけるのである。Lissie の話は Suwelo を通して Fanny, Arveyda そして Carlotta にも影響を与え、調和ある生き方をする方向へと導く。Lissie はピグミー、奴隷、魔女と疑われた女、ムーア人の娘、アルビノやライオン、その上白人としても生きてきている。Walker は彼女の変身の歴史を通していろいろな人生を、例えば黒人として白人に迫害され、白人として黒人を差別し、黒人社会でアルビノとして生まれた時には白い皮膚を持つために黒人社会に受け入れられない苦しみ等を示しているのである。Lissie は Hal に自分がライオンであり、白人であったということを話すことが出来ない。Lissie は言う。“But if you love someone, you want to share yourself” (368). Hal は白人と猫を恐がっているので彼の気持を傷つけないと思っている Lissie はどう

しても真実を話すことが出来ないのである。二人が真実を直視出来ない限り、彼等の間には本当の調和はあり得ない。

Hal と Lissie の結婚生活は、最初のうちはうまくいくようにみえる。しかし、Lissie が最初の子供を出産した後、彼は性的不能者となる。彼女の分娩の苦しみを見た Hal は、その苦しみは自分の欲情の結果であると自分を責め不能となってしまうのである。Lissie は写真家と墮落をしたり、その男の子供を産んだりするが、その時も彼は総てを許してその子供を自分で育てる。写真家の写した多くの写真の中に Lissie はさまざまな過去の自分の姿を見させている。Karla F. C. Holloway は次のように論じている。

When Suwelo gazes a series of photographs, he realizes that as different as the women in the pictures look, and as many decades as they encompass, they are all Miss Lissie, the goddess/ancestor of this text. Miss Lissie's timeless characterization enables her to bridge the fragmented cultures of women who have been scattered in the diaspora.⁶

Hal と Lissie は Rafe の家に一緒に住み、Lissie と Rafe が関係を持った時も Hal はそれを黙認する。Hal が Lissie と他の男達との関係を黙認するということは自分の欠点を認めている彼の弱さではあるが、それと同時に Lissie への愛の深さと忍耐、そして彼の強さをも示すものである。

Lissie は Hal と Rafe をそれぞれ違った意味において愛する。Hal は彼女にとって最も親しい欠くことの出来ない人である。彼女は彼のことを次のように考えているのだ。“He was the only person I felt I had known before” (59). そして、また次のように述べている。

“What I can tell you is that he was familiar, comfortable; and what's more, emotionally recognizable. And he felt the same way. I don't have many memories of this life that don't have Hal somewhere in the middle of them. I had to see him every day.”
(59)

彼等の間にはセックスを抜きにした二人のよき関係がある。彼女は彼を高く評価し、気を使い、彼女が秘密をもっているために二人の間に完全な調和があるとはいえないが、その絆は固いものである。

Hal は "Lissie was our wife" (39) と言う。これは Hal が Lissie と Rafe との関係を知っていたということである。Hal にとって最も大切なことは、どんなことが起ころうとも Lissie と共に住みうまくやっていくことなのだ。もし Hal が Rafe に嫉妬して怒りをぶちまけたりすると、Hal は最も大切な人 Lissie と良き友である Rafe を失うことになる。Lissie は Hal のことを自分の息子のように考えている。しかし彼女は Rafe との愛を必然的なものと信じているのである。Rafe は Lissie を 500,000 年間生きてきた女神として、いろいろな創造物に生まれ変わった経験をもつすばらしい女性として愛しているのだ。見た所、Lissie は自己本位の女性ようであるが、彼女は二人の男性を尊敬し、彼等の気持を傷つけないようにと努力している。Lissie, Hal そして Rafe の間には彼等だけにしか理解出来ない調和がある。だからこそ三人は共に暮すことが出来るのだ。しかし、彼等もこの結論に達するまでには苦しんでいるのである。"We [Lissie and Hal] developed what you call an understanding. But before we reached it, we had both of us, shed rivers of pain" (110). Hal は Lissie が Rafe より自分の方をより愛しているという自信をもっているが、これは彼が肉体的な愛よりも精神的な愛の方が大切であると考えているからだ。Hal が Lissie が死ぬ前に画いた絵を見て怒りを感じるのはそのためである。彼女の絵に画かれた木にはいろいろな物が—白人やライオンでさえも—ぶら下っているのに彼等の庭からは何も画かれていないからである。Suwelo は説明する。"Miss Lissie painted herself" (412). Walker は Suwelo に Lissie が白人であり、ライオンであったという真実を Hal に知らせ、調和へと導く役目を与えている。

Hal が老人ホームに居る間にいくつかの注目すべき出来事が起こる。第一に Hal は Lissie がテープに録音した話を聞き、自分が彼女に一番愛されているという自信が崩れ去ったことだ。彼は悲しむが、すぐに自分が悪いことに気付くのである。"It's my own fault Lissie couldn't love me more. Rafe let her be everything she was. I couldn't do that."

(414). 第二に Hal はもう白人を恐れていない。彼の老人ホームでの一番の友達は何人である。Hal は視力を失ったために憎悪とか恐れなしに白人を人間として、友達として感じる事が出来る。そして彼は人種偏見を持っていたことを反省しているのである。それは彼の人間としての向上を意味する。第三に Hal が Miss Rose と結婚して、彼等がセックスの関係をもつことである。Miss Rose が "I know she [Lissie]'d want me to look after you" (411) と言った時、Hal が "You don't want Suwelo to think that's the only thing" (411) と言うのはそれを物語っている。だから、"Miss Rose blushes. She definitely does" (411) と書かれているのである。最後に Hal が近い将来に視力を回復するだろうという暗示がある。彼は物理的には視力を失っているが、Lissie と彼女が描いた絵の隅の赤い点は見る事が出来る。Hal はその絵を逆さまに見ているが、もし彼がその絵を正しい向きに見れば、彼はその点をよりはっきり見る事が出来るだろう。それは彼が再び視力を取戻す希望を示している。

Suwelo は Lissie と Hal の二人と共に暮して彼等に影響され、調和への道を歩み始めているようにみえる。しかし彼も Fanny と共に Arveyda と Carlotta 夫妻との複雑な関係に解決の方法を見出せないで苦しんでいる。Suwelo は Fanny がアフリカへ行っている間 Carlotta と関係を結ぶが、Fanny が帰って来るや否や Carlotta を置き去りにして Fanny の許に帰ってしまうのである。彼が "Carlotta meant very little to me" (320) と言った時、Fanny は彼の余りにも自分勝手な態度に堪えられないで彼と別れる気持が固まる。一方 Carlotta も孤独の生活に堪える事が出来ずに Suwelo との情事をもつ。二人共お互に相手を利用したと思っているが、"There had not been a victim and an oppressor; there'd really been two victims" (386) と苦しんでいるのである。その時には、彼等の間にはもちろん愛も調和もない。しかし、しばらくして Suwelo が自分のしたことの許しを乞うために再び Carlotta に会った時、彼女もまた以前の彼女とは違っていた。彼は心の扉を Fanny にではなく Carlotta に向って開き、彼等の間に調和ある関係が始まるのだ。Donna Haisty Winchell は彼等のことについて次のように述べている。

In order to achieve spiritual freedom, Suwelo and Fanny, Carlotta and Arveyda have to return to the lifestyle of their ancestors, a lifestyle in which neither seeks dominion over the other and thus to the other. Each couple chooses to live apart—and free—in order to live in harmony.⁷

時には、別れて暮すということはある人にとっては一緒に暮すよりむしろ調和を増すということはあることである。

自分で調和ある生活を手にすることが難しい人々には、そのような生活に導く人々が必要とされる。*The Temple of My Familiar* には何人かのヒーラー（治療する人）が登場する。彼等は互に影響し合って共に調和への道を歩む。先ずこの小説の中に登場するミュージシャン達について考えてみる。Arveyda はロックシンガーとして多くの人々に愛され、彼の音楽は人を納得させる力をもっている。“They flocked to him as once they might have to priests. He did not disappoint them. Each time he played, he did so with his heart and soul” (24). 彼は頼まれもしないのに人々に楽しみと安らぎを与え、特に Carlotta のために多くの歌を歌い、彼女は彼を理解し、彼等の間に和解が成立する。

Shug はブルースシンガーである。ブルースは貧困や抑圧の苦しみを歌ったものでありそれを聞いた人々は慰さめられ、落着きを取戻し、苦しさを切抜けることが出来るのだ。人々は Shug の歌を愛し、特に彼女が *The Color Purple* の中で Celie のために歌を作った時、それは Celie に生きる力を与えたのである。言い換えれば歌が彼女を立ち直らせ、それによって彼女は立派に独立して、調和ある生活へと導かれるのだ。Shug は又、教会を設立し、彼女の経験から福音書を書き、人々を救うのである。彼女は “HELPED are those who love others unsplit off from their faults; to them will be given clarity of vision” (288) と書いているが、これは彼女の Celie への愛を示している。Shug はまた次のように述べている。“HELPED are those who find something in Creation to admire each and every hour” (287). これは Celie が神を信じる事が出来なくなった時、Shug が彼女に次のように言ったことからきたものである。“I think it pisses God off if you walk by the color purple in a field

somewhere and don't notice it"⁸ Shug は福音書の中でハーモニーのことにも言及している。"HELPED are those whose every act is a prayer for harmony in the Universe, for they are the restorers of balance to our planet" (288). これは、この自然破壊の行われている世の中において Shug—すなわち Walker—の希望と願望を表わしている。

Carlotta は大学で教えるのを止めた後、ベルチャイミストになる⁹。美しいベルの音が聞こえるということは、人々に天使の出現を思わせる。彼女は人々に幸福を与える女性になるのである。音楽家にとって大切なことはハーモニーを保つことだ。音楽は彼等に慰めや幸福を与え、調和ある人生へと導く。悩める者の心の痛みや苦しみを癒すという意味において、これらのミュージシャン達は医者や牧師と同じようにヒーラーと呼ぶことが出来るだろう。

Fanny はマッサージ師になる道を選ぶ。彼女はマッサージ師として、患者に優しく、親切にしなければならない。そうすることによって、破壊の淵に立っていた彼女は人の痛みを理解して肉体的、精神的に苦しむ人々を彼女自身と Arveyda をも含めて治療出来るようになるのだ。

愛は時には Arveyda と Zedé の愛のように苦しみを伴うものもあるが、一方ではそれは人を立ち直らせる大きな力をもっている。Celie と Albert の間に和解が成立した後、彼等は互に同志のような感情をもつ。それは、Gay Wilenz が指摘しているように男性と女性の愛以上のものである。

... because it not only reflects the possibility of growth in Arbert but it also emphasizes the necessity of male-female bonding. In this women-identified novel [*The Color Purple*], there is still a potent vision of the bonding of the entire Black Community.¹⁰

彼等の治療の方法や、その結果は違っても、彼等は人々を立ち直らせ、結びつけて、調和をもたらすための大切な役目を果たすのである。

調和を保つために大切なヒーリングパワーに加えて、この小説には幾つかの思いもよらない出来事が起こっている。第一に、Zedé と Carlotta が La Escuela de Jungla から Mary Ann によって救い出されることだ。

第二に、Lissie が Lulu として生きていた時、長い間ハーレムに捕われていた二人の年取った女性達を奇蹟を起こして解放する。第三に、Ola が Orinka で彼と彼の家族のための場所を作ったので Olivia と Fanny は安全に Ola の所へ行ける。第四に、Fanny は驚くべき力をもっていて、Suwelo が決して理解することの出来ない方法で、彼女の手に入れたいと思うものの総てを手に入れることが出来る。最後に Hal は白人の友人を持ち、不能から回復して、目が見えるようになるという希望と、近い将来に猫を恐れなくなるという暗示がある。

The Temple of My Familiar を書く前の Walker の小説は、登場人物が社会の底辺で苦しむ人達ではあるが、その結末はどちらかと言えば楽観的なものである。例えば、*The Color Purple* の結末は読者が期待しているよりも楽観的なものだ。そして、それは議論を呼んだ。Winchell は次のように論じている。“Walker the optimist has been there in her fictional worlds all along, so optimism should come as no surprise. After all one acknowledged weakness of *The Color Purple* is too-pat storybook ending.”¹¹

しかし、*The Temple of My Familiar* の中では Walker は悲観的な将来について、例えば Suwelo を通して次のように言っている。

“Prior to this time in history, at least we thought we'd have a future, that our children would see freedom, even if we never did. Now, they've made sure that none of our children will ever live the free and healthy lives so many generations of oppressed people have dreamed of for them. And fought so hard for. I very often think of violence, but any violence I could not do at this point would seem, and be, so small.” (302)

Lissie もまた、その悲観的な将来を “I am tired of it. Not tired of life. But afraid of what living is going to look like and be like next time I come” (191) と述べている。彼女は何度も生まれ変わってきたが、前世ではこのような考え方はしていないのだ。Walker でさえも、自分達に出来ることは余りにも小さいものであると自覚しているのだ。

しかし一方では、彼女は登場人物の一人に「人間は地球を破壊してしまう程には馬鹿ではない」と言わせているが、これは彼女が人間の理性や可能性を信じているからだ。彼女は、小説の中でヒーラー達について、または幾つかの思いがけない出来事について書いているが、これらのことは不可能と思われることも可能になるという明るい希望を与え、この環境破壊の進んだ地球上に住む我々に楽観的な考え方を教えてくれているのである。Walker を「planet の environmentalist であり、would-be savior である」と言っている Winchell は次のように述べている。

Walker yearns for a time when people had the luxury and dignity of dying naturally, of old age. If Earth's inhabitants today improved the quality of the environment to the point where they could die of old age, the process would automatically preserve the planet's health.¹²

もしも我々が地球上のすべての生物、植物、そして自然と調和のとれた生活をする事が出来たなら、地球は無事であろうという Walker のメッセージを受け取ることが出来る。

Winchell は Walker について次のように指摘する。

The new woman that Walker has become has learned not to confront the world with a clenched fist—although like her version of Christ she may simply hide it behind her back most of the time—but rather with the open hand of unity.¹³

地球上のすべての人々が拳を握りしめて争ったなら、我々は加害者ともなり、被害者ともなってその結果として地球は破滅へと向う。

Shug は彼女の福音書の中で、“HELPED are those who strive to give up their anger” (288) と書き、そして、“HELPED are those who forgive” (289) と教え、最後を、“HELPED are those who know” (289) で閉じているが、彼女は我々に人々への怒りを捨て、許すということを知らなければ調和ある未来を期待することが出来ないことを警告しているのであ

る。この小説の登場人物の問題はまた、今日の我々の問題でもあるのだ。我々もこの同じ地球上で生きていかなければならないのだから。

注

1. Gayle Jones, *Liberating Voices* (Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press, 1991) 156.
2. Alice Walker, *Living by the Word* (San Diego, New York, London: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1988) 68.
3. Walker, *Living*, 62.
4. Alice Walker, *The Temple of My Familiar* (San Diego, New York, London: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1989) 118.
以下テキストの引用は本書より行ない、ページ数は括弧内に記す。
5. Mae G. Henderson, "The Color Purple: Revisions and Redefinitions." *Alice Walker*. ed. Harold Bloom (New York, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1989) 75.
6. Karla F. Holloway, *Moorings & Metaphors* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1992) 47.
7. Donna Haisty Winchell, *Alice Walker* (New York: Twayne Publishers, 1992) 130.
8. Alice Walker, *The Color Purple* (San Diego, New York, London: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1982) 167.
9. チャイミストについて Carlotta は *The Temple of My Familiar* の中で次のように説明している。"There are wind chimes of all sizes, colors, and descriptions. Some are made of sandal or balsa wood, some of bamboo, some of metal. They are all beautiful, with sweet, clear tones. Then there are my hundreds of bells—reindeer-harness bells, cowbells, school bells, every kind of bell. From all over the world. I run through a dozen bells and chimes quickly, with a hardwood stick, and the whole room vibrates with the beautiful, clear, and gentle sounds." (376)
10. Gay Wilentz, *Binding Cultures* (Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1992) 72.
11. Winchell, 106.
12. Winchell, 113.
13. Winchell, 134.

語構造のパラドックスと音律構造*

—経済性の原理との係わり—

西原 哲雄

SYNOPSIS

Morphology was at first eclipsed when generative grammar came on the scene. Generative grammarians then rejected the validity of a separate morphological component. However, since Siegel (1974) suggested that a morphological component was autonomous, her theory has widely been accepted by many generative grammarians. Recently, "Bracketing Paradox" has been a subject of controversy among many researchers, and the problem is still controversial. To solve this problem, I, following Booij & Lieber (1989) in the respect that representations of word structure need biplanar representations (of Morphological Structure and Prosodic Structure), make a proposal that "Economy Principle" in GB theory should be taken account in the derivational representations of words in the application of phonological rules.

0. 序

初期の生成文法理論においては、まず中心となる統語部門があり、音韻部門と意味部門は統語部門に付属するものとして考えられ、形態部門（語形成部門）は自立的な部門としてはみなされておらず、音韻部門の中に含められていた。しかし、Siegel (1974) が形態部門の自立性を認めて以来、その主張は Kiparsky (1982), Mohanan (1986) などによる語彙音韻論 (Lexical Phonology, LP) の枠組みを経て、今日一般に受け入れられるところとなっている。そこで、近年の形態論・語形成論の分野で注目されている問題に目を向けると、研究者の間で論争的となりさまざまな提案がなされてきている「語構造のパラドックス」といわれる現象がある。本稿では、この語構造のパラドックスを音律構造 (Prosodic

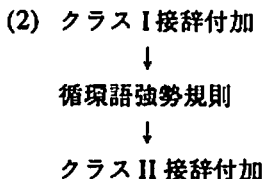
Structure) と形態構造 (Morphological Structure) の2面表示を認める Booij & Rubach (1984), Booij & Lieber (1989) の枠組みで解消できることを指摘する。さらに、GB理論における基本的な考えであるモジュール性 (Modularity) という考えに従って、統語部門での“経済性の原理” (Economy Principle) が音韻部門での音韻規則適用の際の語構造の“派生表示”に係わっていることも指摘したい。

1. 語構造のパラドックス

英語の接辞について、クラスI接辞とクラスII接辞と呼ばれる2種類の接辞が Siegel (1974) や Allen (1978) らによって区別されている。そこで、この2種類の接辞の特徴を(1)に示すことにする。

- (1) a. クラスI接辞は、派生語の強勢の位置決定に関与し、付加されると、付加される語(を基体 (base) と呼ぶ) の第1強勢の移動を引き起こすことがあるが、クラスII接辞は引き起こさない。
- b. クラスI接辞は接辞自身の形または基体の形を変えることがあるが、クラスII接辞は自身にも基体の形にも何の変化も引き起こさない。

(1a) の特徴について、Siegel (1974) は「循環語強勢規則はクラスI接辞付加より後に、そしてクラスII接辞付加より前に行われる」と述べており、これによってクラスI接辞とクラスII接辞の強勢付与に関するふるまいの違いが自動的に説明されることになる。(2)を参照.)



したがって、このような2種類の接辞の特徴からクラスI接辞はクラスII接辞の内側に生じ、通常、外側には生じないことになる。(2)に示されたような規則適用の順序付けを順序付けの仮説 (ordering hypothesis) と呼ぶ。

さらに、Allen (1978) はクラスI接辞、クラスII接辞と呼ばれていたものをレベルI、レベルIIと呼び、さらに、複合語形成と non- の付加の段階をレベルIIIと呼んで、この3段階に規則が順序付けられているとする拡大順序付けの仮説 (extended ordering hypothesis) を提案している。²

しかしながら、実際に、英語の派生語の中にはこの順序付けの仮説に対して例外となる例が多く存在している。例えば、ungrammaticality という語は、-ity はクラスI接辞、un- はクラスII接辞であるので、順序付けの仮説に従えば、(3a) のような構造を持つと考えられるが、形態的下位範疇に従えば、(3b) のような構造を持っていると考えられる。

- (3) a. [un [[grammatical]_A ity]_N]_N
b. [[un [grammatical]_A]_A ity]_N

このように、2つの条件を同時に満たす語構造を派生させることのできない現象を語構造のパラドックスという。以下に、語構造のパラドックスのタイプ別の例を示す。

- (4) クラスII接尾辞の外側にクラスI接尾辞が付加されている例
developmental, governmental, extendability, perceivability
(5) クラスII接尾辞付加の後にクラスI接頭辞が付加されている例
inconceivable, indescribable
(6) クラスII接頭辞付加の後にクラスI接尾辞が付加されている例
extrametricality, underestimation, ungrammaticality
(7) 複合語形成の後にクラスI接頭辞が付加されている例
atomic scientist, South American, transformational
grammarian

さらに、unhappier という後では、音韻的には、-er は3音節語には付加

されないので、(8a) のような構造を持っていると考えられるが、意味的には unhappier は "not more happy" ではなく "more not happy" であるので (8b) の構造を持っていると考えられる。

- (8) a. [un [[happy]_A er]_A]_A
 b. [[un [happy]_A]_A er]_A

これは、順序付けの仮説に対しての例外ではないが、2つの条件を同時に満たすことができないという点から、語構造のパラドックスの一例として扱う。以上のような、語構造のパラドックスを解消するために、Kiparsky (1983), Pesetsky (1985), Halle & Vergnaud (1987 a & b), 佐藤 (1990) などさまざまな提案が行われてきたが、いずれの考え方もすべてのタイプのパラドックスについて一貫した説明を与えることはできない。そこで、次節では、Nespor & Vogel (1986) などが主張する音律音韻論 (Prosodic Phonology, PP) の立場から語構造のパラドックスの解消を試みることにする。

2. 形態構造と音律構造の同時性

前節では、語構造のパラドックスを概観してきたが、ここでパラドックスの特徴をもう一度見直してみよう。まず、派生された語構造が、形態論で機能的に組み立てられた形態構造になっている。すなわち、語構造の表示が形態論という単一の観点からのみ行われている。しかしながら、語構造の表示は音韻規則の適用領域を見れば形態構造のみでは不十分である。そこで、語構造に形態構造と音韻構造の2つのレベルを認めることでパラドックスを解消しようとしたのが Booij & Rubach (1984) である。³ Booij & Rubach (1984) の音韻構造の枠組みは Nespor & Vogel (1982, 1986), Selkirk (1984) と同様に PP の音律構造 (Prosodic structure, PS) を基本にしている。PP の音律構造は (9) に示すような音律範疇 (syllable, Foot, prosodic word など) が階層を成している。⁴

- (9) (-----) Utterance (U)
 (-----)(-----) Intonational Phrase (IP)
 (-----)(-----)(-----) Phonological Phrase (Φ)
 (-----)(-----)(-----)(-----) Prosodic Word (Wd)
 (---)(---)(---)(---)(---)(---) Foot (F)
 (---)(-)(-)(-)(---)(---)(-)(-)(-)(-)(-)(-)(-)(-)(-) syllable (σ)

Booij & Rubach (1984) を発展させたものが, Booij & Lieber (1989) であるが, Booij & Lieber (1989) は, 形態構造と音律構造の2つのレベルを認めた上で, それらの構造は “並んで” (tandem) いて, かつ, “同時性” (simultaneity) を持っているとして主張する。これによって, 語構造のパラドックスは簡単に解決できるとしている。例えば, unhappier という語のパラドックスについて, (10) に示すような2つの構造を考える。

- (10) 形態構造 [[un [happy]] er]
 音律構造 [un [[happy] er]]

音律構造は形態構造と異なり, 音律範疇である Wd から構成されている。この Wd の構成は, 形態構造のクラス I とクラス II の区別に対応しており, Booij & Rubach (1984) は前者に対応するものを密着接辞 (cohering affixes), 後者に対応するものを非密着接辞 (non-cohering affixes) と呼び, 密着接辞は単独では, Wd を構成できず, 先行または後続する Wd と融合し, 1つの新しい Wd を構成する。一方, 非密着接辞は単独で Wd を構成するとしている。この対応を Szpyra (1989) は形態構造から音韻構造への mapping rule として定式化する。(11) を参照。)

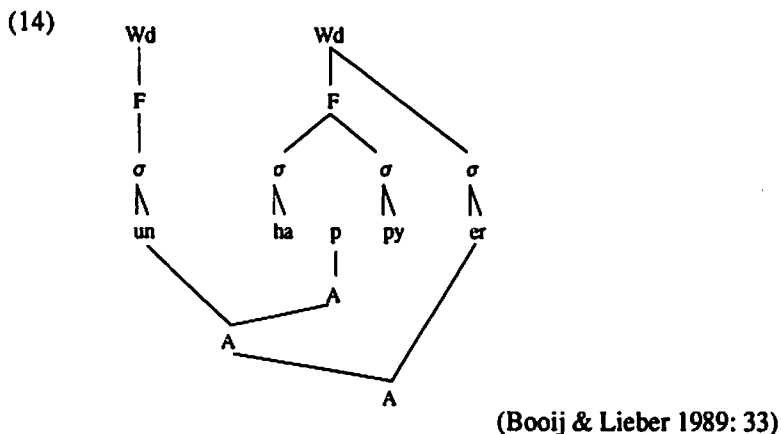
| (11) | suffixes | prefixes | |
|----------|----------|----------|--------------------|
| class I | +X | X+ | |
| class II | [+X] | [X+] | (Szpyra 1989: 185) |

(11) に示した形態構造は (12) の前音韻写像規約 (prephonological mapping convention) によって, (13) のように Wd に写像される。

$$(12) [\quad] \rightarrow ([\quad])_{Wd} \quad (\text{Szpyra 1989: 186})$$

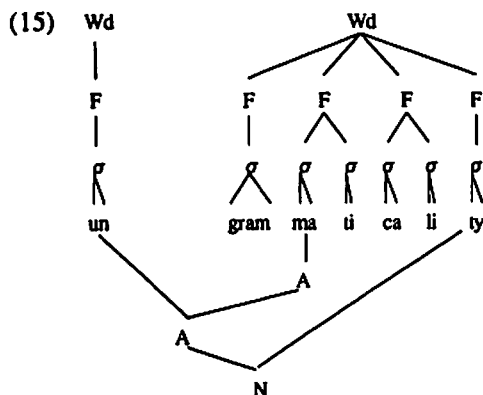
| (13) | suffixes | prefixes |
|------|---|---|
| | class I [[elastic] +ity ₁] → (elasticity) _{Wd} | [in ₁ +[moral]] → (immoral) _{Wd} |
| | class II [[kind]+ness ₂]] → (kind) _{Wd} (ness) _{Wd} | [[un ₂ +[ripe]]] → (un) _{Wd} (ripe) _{Wd} |

この定式化に従えば, unhappier という語は以下に示すように, 形態構造と音律構造の両方を持った構造で示すことができる。



(14) は unhappy という語が, 実は, $(\text{un})_{Wd}$, $(\text{happy})_{Wd}$ という2つの Wd で構成されており, 比較接辞 -er は Wd である happy に融合され, 新しい Wd である $(\text{happier})_{Wd}$ を構成するが, 形態的には unhappy に付加されることを示している。⁵ そこで, unhappier は (8) のいずれの構造も満たすことになり, パラドックスは解消される。この分析では, Pesetsky (1985) で必要とされる余分な操作の接辞の移動はいらない。さらに, ungrammaticality のような語についても適用できる。un- はクラ

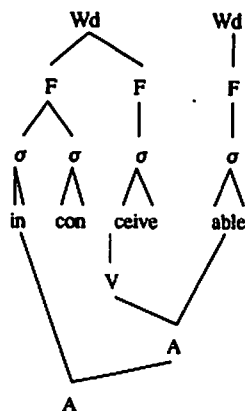
スIIの接頭辞であり、したがって非密着接辞となり、単独で Wd を構成する。一方、-ity はクラスI 接尾辞であり、したがって密着接尾辞になり、単独で Wd を構成することができず、先行する Wd である grammatical に融合され、 $(un)_{Wd}$, $(grammaticality)_{Wd}$ という2つの Wd から ungrammaticality という語は構成されている。この音律構造と形態構造を満たすものが (15) である。



(Booij & Lieber 1989: 36)

(15) は (3) で示されたいずれの構造をも満たすことになり、パラドックスは解消されることになる。Booij & Lieber (1989) はこの2つを扱っているだけで、上述の (4), (5), (7) の例については何も言及していない。そこで、これらの例も、実際には同様の扱いができることを以下に示すが、その際、服部 (1991) で提案された慣用化 (institutionalization) もこれらの構造に係わっていることを示す。(5) の例では、in- はクラスI 接辞なので、conceive に融合され、新しい Wd を構成する。一方、-able はクラスII なので、単独で Wd を構成する。したがって、(16) のように表示できる。

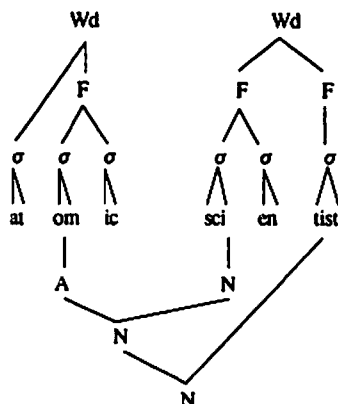
(16)



(16) から、音律構造は $(inconceive)_{Wd}$, $(able)_{Wd}$ という2つの Wd で構成されていることがわかる。すなわち、クラスI接辞 *in-* は *conceive* に付加され、融合されることになるので、順序付けの仮説は守られることになる。一方、同時に示されている形態構造が意味の合成性を守っているのので、パラドックスは解消されることになる。

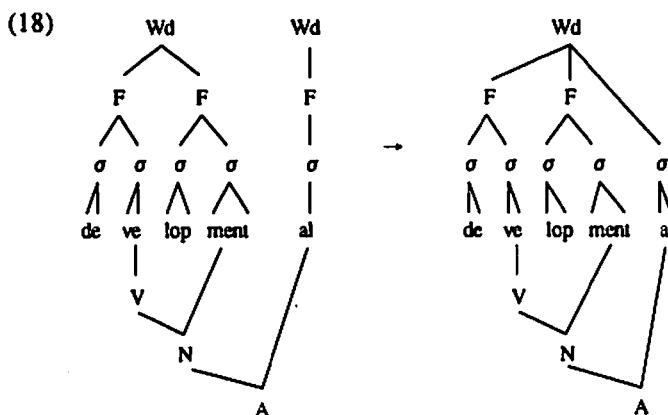
(7) の例では、*-ist* はクラスI接辞なので、先行している *science* に融合され、新しい Wd を構成する。一方、*atomic* は単独で Wd を構成する。そこで、(17) のように表示することができる。

(17)



(17) では、音律構造は (atomic)_{wd} と (scientist)_{wd} の2つの Wd から構成されており、接尾辞 -ist は複合語全体に付加されるのではなく、science という Wd に付加され、融合されている。それゆえ、順序付けの仮説を守ることになり、また、同時に示されている形態構造が意味の合成性を守っているの、パラドックスは解消されることになる。

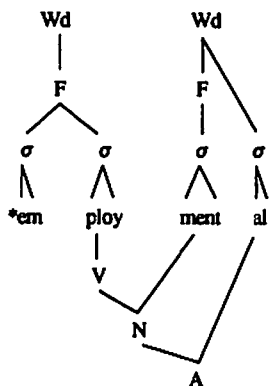
(4) の例では、-ment, -able は、先に見た接尾辞 -er のようにクラス II に属するが音韻的にはクラス I の性質を持ち、先行する Wd に融合されると考えられる。さらに、-al もクラス I に属するので、先に融合された Wd である (development)_{wd} に融合され、1つの Wd になる。したがって、developmental という語は (18) のように表示され、順序付けの仮説は守られるので、パラドックスは解消される。



では、なぜクラス II の接辞であり、単独で Wd を構成するはずの -ment, -able などが音韻的にクラス I のように働き、隣接する Wd に融合されるのかという疑問に対しては、Selkirk (1982) に従えば、-ment, -able などの接辞はクラス I に属するものとクラス II に属するものの2種類があり、-ment_{II}, -able_{II} が類推によって、-ment_I, -able_I に再分析されたものであると考えられる。しかし、Selkirk が述べるように類推による再分析なら、類推はすべての -ment_{II}, -able_{II} の派生語に働くはずであるが、

再分析が行われるのは、 $-\text{ment}_{II}$ については上述の2語だけで、 $-\text{able}_{II}$ の方も $-\text{ment}_{II}$ より数は、多いものの、派生語の一部についてだけである。そこで、この事実を説明できるものものとしては服部 (1991) で提案されている「慣用化」(institutionalization) があげられる。⁶ すなわち、それぞれの例の接頭辞や接尾辞を取り除いた部分 (developmental の development, perceivability の perceivable など) が独立した語句として、英語話者の頭の中で、定着し、慣用語句として使われているということである。⁷ そこで、慣用化の段階に入ったこれらの語は (18) に示されたような音律構造によってパラドックスは解消されることになる。しかしながら、慣用化されていないその他の語については、(19) のような構造を持ち、順序付けの仮説を満たすことができないためにクラスIIの接辞が融合した派生形は存在しない。

(19)



3. 音律構造と経済性の原理

前節では、語構造のパラドックスは、語構造が形態構造と音律構造の2つの派生表示を持つことで、解決できることを見た。しかしながら、ここで、1つの問題が残されることになる。それは、Chomsky (1988, 1992) などで提唱された GB 理論の統語部門における“経済性の原理”(Economy Principle, EP) に係わる問題である。EP は (20) に示される

ような2つの定義からなる。

(20) 経済性の原理 (Economy Principle)

- a. 派生の経済性 (Economy of Derivation): 最も経済的な派生をとること
- b. 表示の経済性 (Economy of Representation): 余分な表示(記号)をさけること

(20a) は、コストが最も少ない派生が要求され、コストが高い派生が生じることを排除するものであり、最小努力 (Least Effort) と呼ばれるものである。さらに、(20a) の定義は、派生と操作のコストとの関係について、次のように定義されている。

- (21) a. 操作の数が多いいものが少ないものよりコストが高い。(最小操作)
- b. 操作の距離が長いものが短いものよりコストが高い。(最短連結)

すなわち、(21a, b) は操作が最小でかつ、最短でなければならないことを示している。例えば、(22) に示される John は t^1 の位置から2回の移動によって、連続循環的に文頭に移動したものと考えられた。

(22) John seems [t^2 to be likely [t^1 to win]]

移動する距離は t^1 から文頭の John まで一定であるので、2回の移動のそれぞれの距離が最短であれば、(21b) から最も経済的な派生となるが、逆に、操作の回数は最大になり、(21a) からは最も非経済的な派生となる。一方、 t^1 から1回の操作で文頭まで移動すると、操作の回数は最小になり、(21a) からは最も経済的な派生になるが、操作の距離は最長となるので、(21b) からは最も非経済的な派生になってしまう。最小操作と最短連結との間のこの対立関係は Chomsky によれば、(23) によって解決される。

(23) 連続循環移動は単一の操作である連鎖形成 (Form Chain: FC) とする。

(23) によって、連続循環移動を全体で1つの操作と考え、それに含まれる一連の操作内操作によって順次最短連結を形成しながら、1つの連鎖を形成するというものである。

一方、(20b) は、派生に余分な要素が存在することを排除し、音声形式 (PF) や、論理形式 (LF) での完全解釈 (Full Interpretation, FI) の概念が、要求するものである。

しかしながら、先に見た Booij & Lieber (1989) によるパラドックス解消案での語構造の表示は (24) に見られるように、従来の表示とは異なりパラドックスの構造を持たない普通の語の表示においても、2つの派生表示を認めることになり、(20b) に反する非経済的な派生表示となる。 (“m” は形態構造を、“p” は音律構造を示す)

(24) a. 従来の表示

普通の構造

[]_m

パラドックスの構造

[]_m []_p

b. Booij & Lieber (1989) の表示

普通の構造

[]_m []_p

パラドックスの構造

[]_m []_p

このような、表示の複雑性の問題を解決するために、派生の経済性での対立関係を解消したのと同様に、(25) に示す新しい定義を提案する。

(25) 2つの同一（派生）表示は単一の表示である重複表示 (Overlapping Representation, OR) とする。

(25) によって、Booij & Lieber (1989) の形態構造と音律構造が同一である普通の語の表示も、(26) が示すような従来の表示と同様に単一の表示となり、(20b) の表示の経済性を満たすものとなり、語構造が2面表示を持つという考え方に問題は生じない。

$$\begin{array}{c}
 (26) \quad \text{普通の構造} \\
 \left[\quad \quad \right]_m \left[\quad \quad \right]_p \\
 \quad \quad \downarrow (25) \\
 \left[\quad \quad \right]_{m(=p)}
 \end{array}$$

4. 結語

以上、本稿では、語構造のパラドックスの問題について、PPの音律構造による分析が従来の解決案にまさる一貫した説明を与えることを見た。これは語構造が2平面 (biplanar) からなる多面構造であると考えることの妥当性を示している。そして、この構造の妥当性は OR を加えることによって経済性の原理の一つである“表示の経済性”が満たされていることから明らかである。

注

* 本稿は、日本英文学会中国四国支部第45回大会 (1992年 10月 24日、於鳴門教育大学) において口頭発表した草稿を改題の上、加筆修正したものである。

1. 一般に、括弧付けの逆説 (Bracketing Paradoxes) または、順序付けの逆説 (Ordering Paradoxes) と呼ばれるが、本稿では、「語構造のパラドックス」と呼ぶ。

2. Selkirk (1982) はクラスII接辞で、複合語の外側に付くものが多く存在することを指摘し、次のような順序付けを主張している。

クラスI接辞付加

↓

クラスII接辞付加と複合 (Selkirk: 1982)

3. Marantz (1987) も語の形態構造と音韻構造は同一構造ではないと述べている。形態構造と音韻構造は互いに独立しており、別々の制約、原則に従い、接辞付加と音韻規則が同一レベルで行われる語彙音韻論の分析は誤りであると主張している。

4. 音律範疇の設定には、研究者の間で多少の相違がある。prosodic word (Wd) は Nespor & Vogel (1986) などの phonological word (PW) に相当する。

5. クラスII接辞は、単独で Wd を形成するはずだが、-er のようにクラスIIの接辞の中には音韻的にはクラスI接辞のようにふるまい、隣接する Wd に融合する接辞があると Szpyra (1989: 189-190) で述べられている。
6. 「慣用化」について詳しくは服部 (1991) を参照のこと。
7. 服部 (1991) では、unhappier の unhappy も慣用化された語句であるとしているが、音律構造である Wd に従えば、その必要はなくなる。

参考文献

- Allen, M. 1978. "Morphological Investigations." Ph. D. dissertation, University of Connecticut.
- 荒木一雄. 1989. 「オーダリング・パラドックスについて」『相愛大学研究論集』第5巻. 83-97.
- Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Aronoff, M. & N. Sridhar. "Morphological Levels in English and Kannada or Atarizing Reagan." In Richardson, J. H. et al. (eds.) *Papers from the Parasession on the Interplay of Phonology, Morphology and Syntax*. 3-16. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Booij, G. 1992. "Lexical Phonology and Prosodic Phonology." In Dressler, W. U. et al. (eds.) *Phonologica 1988*. 49-62. Cambridge: CUP.
- Booij, G. & J. Rubach. 1984. "Morphological and Prosodic Domains in Lexical Phonology." *Phonology Yearbook* 1. 1-28. Cambridge: CUP.
- Booij, G. & J. Rubach. 1985. "A Grid Theory of Stress in Polish." *Lingua* 66, 281-319.
- Booij, G. & R. Lieber. 1989. "On the Simultaneity of Morphological and Prosodic Structure." Ms, Free University, Amsterdam.
- Chelliah, S. L. 1992. "Bracketing Paradoxes in Manipuri." In Aronoff, M. (ed.) *Morphology Now*. 33-47. New York: State University of New York Press.
- Chomsky, N. 1988. "Some Notes on Economy of Derivation and Representation." Ms, MIT.
- Chomsky, N. 1992. "A Minimalist Program for Linguistic Theory." *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1. MIT.
- Chomsky, N. & M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Cohn, A. 1989. "Stress in Indonesian and Bracketing Paradoxes." *NLLT*. 7, 167-216.

- Halle, M. & J.-R. Vergnaud. 1987a. "Stress and Cycle." *Linguistic Inquiry* 18, 45-84.
- Halle, M. & J.-R. Vergnaud. 1987b. *An Essay on Stress*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 服部義弘. 1991. 「語構造のパラドックスと慣用化」『愛媛大学人文学会 創立15周年記念論集』愛媛大学人文学会. 291-306.
- 原口庄輔. 1991. "Least Effort and Most Effort." 『現代英語学の歩み—安井 稔博士古稀記念論文集』東京: 開拓社. 412-421.
- Inkelas, S. 1989. *Prosodic Constituency in the Lexicon*. Ph. D. dissertation, Stanford University. New York: Garland 1990.
- Kiparsky, P. 1982. "From Cyclic Phonology to Lexical Phonology." In H. van der Hulst et al. (eds.) *The Structure of Phonological Representations Part-I*. 131-75. Dordrecht: Foris.
- Kiparsky, P. 1983. "Word Formation and the Lexicon." In Ingemann, F. (ed.) *Proceedings of the 1982 Mid-American Linguistic Conference*. 3-29. Lawrence, Kans.: Department of Linguistics, University of Kansas.
- Lieber, R. 1992. *Deconstructing Morphology*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 折矢好弘. 1976. 『英語音声学』東京: こびあん書房.
- Marantz, A. 1987. "Phonologically Induced Bracketing Paradoxes in Full Morpheme Reduplication." *WCCFL*. 6, 203-11. Stanford: Stanford Linguistic Association.
- May, R. 1977. "The Grammar of Quantification." Ph. D. dissertation, MIT.
- Mohanan, K. P. 1986. *The Theory of Lexical Phonology*. Dordrecht: Foris.
- Nespor, M. & I. Vogel. 1982. "Prosodic Domains of External Sandhi Rules." In H. van der Hulst et al. (eds.) *The Structure of Phonological Representations Part-I*. Dordrecht: Foris.
- Nespor, M. & I. Vogel. 1986. *Prosodic Phonology*. Dordrecht: Foris.
- 西原哲雄. 1992. 「Post-Lexical Module 内の音韻規則区分について」『甲南英文学』第7号. 31-48. 甲南英文学会.
- 西原哲雄・豊島庸二. 1993. 「複合語の強勢付与と音韻語」『甲南大学紀要 文学編 85 英語学英米文学特集』158-170.
- Pesetsky, D. 1985. "Morphology and Logical Form." *Linguistic Inquiry* 16, 193-246.
- 佐藤 寧. 1990. 「音韻論における隣接性について」『明治学院論叢』第453号. 英語・英米文学 75. 85-99.
- Selkirk, E. 1978. "On Prosodic Structure and Its Relation to Syntactic Structure." Reprinted in 1980. Bloomington: IULC.

- Selkirk, E. 1982. *The Syntax of Words*. Cambridge, Mass.: MIT. Press.
- Selkirk, E. 1984. *Phonology and Syntax.: The Relation between Sound and Structure*. Cambridge, Mass.: MIT. Press.
- Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT. New York: Garland 1979.
- Sproat, R. W. 1985. "On Deriving the Lexicon." Ph. D. dissertation, MIT.
- Strauss, S. 1982. *Lexicalist Phonology of English and German*. Dordrecht: Foris.
- Szpyra, J. 1989. *The Phonology-Morphology Interface*. London: Routledge.

日英語の音節構造について*

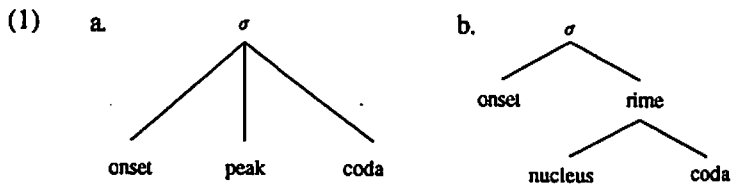
豊島庸二

SYNOPSIS

In this paper, I shall examine the syllable structure in English and Japanese. The central idea used in this paper is what was proposed by Levin (1985), that is, N-projection which is the application of X' theory of syntax to the phonological study. Recent literature on Moraic Phonology has shown that 'mora' is a relevant prosodic category and plays an important role (Hayes 1989). I try to reinterpret two concepts the syllable and the mora in terms of the N-projection convention and consider the difference between English and Japanese syllable structures. Compensatory lengthening studied in Hayes (1989) will be reexamined in this paper.

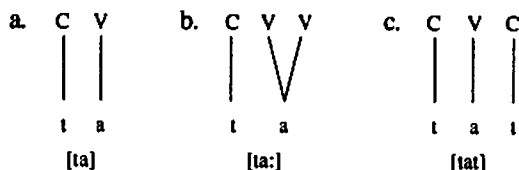
1. 序

音韻論と音声学において、音節は長く議論の的となっている。(1a)で示されるように音節は、母音を中心として前後に随意的な子音を伴って1つの音節が構成されると一般的に考えられる。これはいわゆる平たい構造と呼ばれるものである。それに対して、中心となる母音と前後のそれぞれの子音との結びつきの強さの度合いに違いがあるという考えから、(1b)のように音節の内部に階層的構造を認めることが提案された。近年まで多くの音韻論研究者が採用してきた音節構造である。現在では、ごく一般的に(1b)の音節構造が受け入れられている。(なお、σは音節を表わす。)

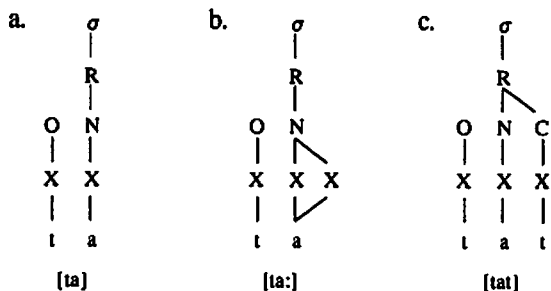


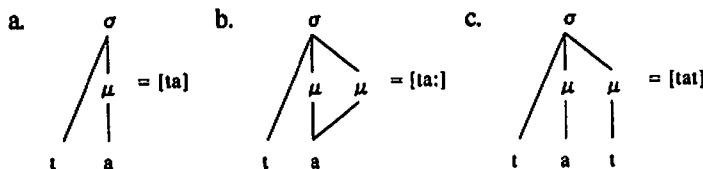
近年, Hayes (1989) などがモーラ音韻論 (Moraic phonology) を提案している。このモーラ音韻論は代償延長 (compensatory lengthening) などの事実から「モーラ」(mora) という単位が重要な役割を果たすと主張する。Hayes (1989) は韻律階層にC V階層を認めるC V理論やそれに代えてX階層を仮定するX理論を否定する。各分節音を直接的に表わす階層ではなく、モーラを表示する韻律階層を設定するのである。Hayes (1989) はC V理論, X理論, モーラ理論の表記を次のように示している。(O は onset, R は rime, N は nucleus, C は coda, そして μ はモーラをそれぞれ表わしている。)

(2) CV Theory (=Hayes' (1a))



(3) X Theory (=Hayes' (1b))



(4) *Moraic Theory* (= Hayes' (2))

(2), (3) と (4) の違いは前述の通り分節音に直接対応する (すなわち分節音の数に対応する) レベルの有無である。モーラや音節の数に関わる音韻過程はあるが、分節音の数に関わるような音韻過程は知られていないという点においてモーラ理論の方が優れているという訳である。

本稿では、まず閉音節の言語である英語の音節構造と開音節であるとされる日本語の音節構造を考察する。その後、適用の一例として代償延長を取り上げ、モーラ理論との相関関係を見ることにする。

2. 開音節と閉音節：英語と日本語の音節構造

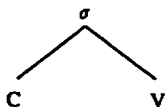
周知の事実ではあるが、英語は典型的に閉音節の言語であると言われる。すなわち、「子音+母音+子音」という音の連鎖が1つの音節を形成でき、codaの子音を持つ典型的な言語である。それ故、英語は(1b)にうまくあてはまる。英語の音節の構成は(5)のように一般的に表される。

(5) $C^{\circ} V C^{\circ}$

また、韻や語形成などいくつかの言語事実が(1b)の階層構造を支持する証拠として挙げられる¹⁾。

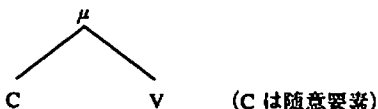
一方、日本語は典型的に開音節の言語である。英語が多くの場合(1)に示されるように、「子音+母音+子音」が1つの音節を形成するのに対し、日本語のような開音節の言語では、当然(6)のような音節構造が考えられる。

(6)



しかし、日本語は「モーラ言語」であるという言い方をされることがある。すなわち、長さの基本単位としてモーラという韻律単位が重要な役割を果たすと考えられるのである（服部 (1979) など参照）。日本語においては最も基本的なモーラの構造は次のようであると考えられる。

(7)

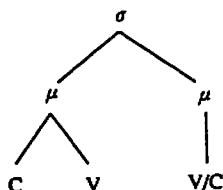


この (7) のモーラの構造は (6) の開音節の構造と同じである。この一致が日本語で音節を認める必要があるかというような議論の一端となるのである。服部 (1979) は 長母音や二重母音の第二要素や撥音、促音がモーラを構成するが、音節とは異なることをアクセントなどの事実から説明する。

- | | | |
|--------------|-------|------------|
| (8) a. [ko:] | (甲) | 1 音節 2 モーラ |
| b. [kai] | (貝) | 1 音節 2 モーラ |
| c. [hoN] | (本) | 1 音節 2 モーラ |
| d. [ne-ko] | (猫) | 2 音節 2 モーラ |
| e. [mot-ta] | (持った) | 2 音節 3 モーラ |

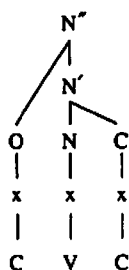
日本語において、音節とモーラの両方を認める必要があるという主張は Kubozono (1993) でも見られる。Kubozono (1993) はスピーチ・エラーの事実から日本語の音節構造は、英語などの言語に見られる (1) の構造とは異なり、(9) のようであると提案する。

(9)

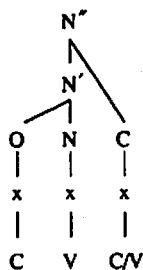


本稿では Levin (1985) の N の投射という考えを基本的に受け入れ発展させたいと思う。簡単に言えば、音節をその核の投射と考えるのである。英語に関しては (10a) に示される音節構造を認める。それに対して、日本語には服部 (1979) や Kubozono (1993) の主張を認め、(10b) に示される音節構造を仮定する。

(10) a.



b.



いわゆるモーラにあたるものはこのモデルでは (10b) で N は N', N'' に直接支配されているが、C は N' の直接の支配を受けない。もっと正確に言えば N'' に直接支配された節点ということになる。その考え方からすれば、英語では、onset と rime がそれぞれモーラとなる。一方日本語では、onset と nucleus からなる N' と coda にあたる部分がそれぞれモーラとなる。

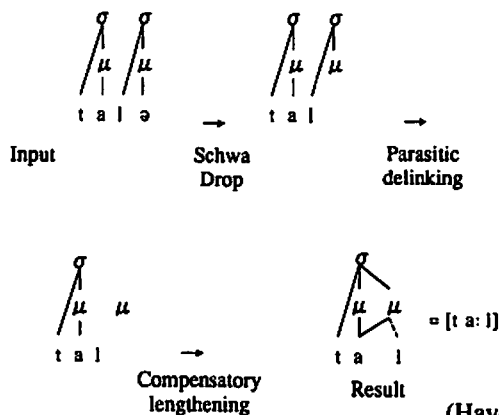
3. 代償延長

代償延長は一般に「隣接した子音が消失したとき、その代償として母

音が長くなること」と言われてきた²。ここでは2節の(10)で示した音節構造が、Hayes (1989)の言う代償延長の事実をうまく説明できるかを Hayes (1989)の主張するモーラ理論などと比較しながら見ていくことにする。

Hayes (1989)は中英語期に起こった「開音節長音化」(Open syllable lengthening)を代償的な長音化の過程としてとらえ、モーラ理論での説明が最も適切であると主張する。一般的に、開音節長音化は「強勢のある音節の母音を長音化する」という過程であると言われる。しかし、Hayes (1989)は開音節の長音化が語末のあいまい母音が消失した場合にのみ起こるという Minkova (1982)の一般化から、開音節長音化は語末のあいまい母音が消失したことに対する代償的過程だと考えるのである。すなわち、Hayes (1989)は、現代英語の *tale* が [talə] → [ta:l] となったのは(11)のような過程を経ているのだと考える。

(11)³



(Hayes 1989: 268-69)

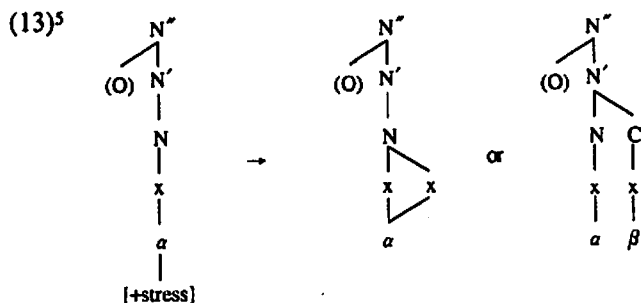
Hayes (1989)は [talə] → [tal] → [ta:] という変化を仮定することは正しくないとする。その理由は、[tal] という音節構造を元々持つ語は長音化されないからであるという。しかし、[tal] という段階ではなく、[taalə] という段階を仮定するとどうであろうか。tale と同じ母音と音節構造を持つ name について見てみると、[naamə] という段階があると考えられ

る(cf. Jones 1989)。もし, [ta:la] という段階があったと仮定すると, 本稿の提案するモデルから以下のように考えることも可能である。まず, (12) のような頭子音規則 (Onset Preference Rule) を仮定する。例えば VC という連鎖よりも CV という連鎖が好まれるという主旨のものである⁴。

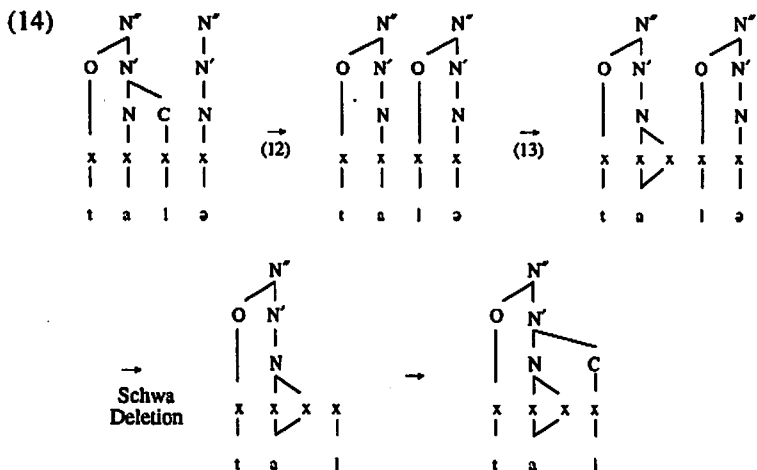
(12) Onset Preference Rule



さらに, 英語 (あるいは閉音節と言われる言語) では, 強勢のある音節には軽音節 (light syllable) が来ないという傾向があると考え (cf. Cairns and Feinstein 1982), (13) のような規則を考える。



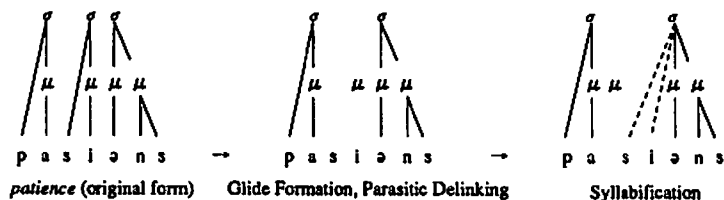
(12) は普遍的な規則であり, 可能な限り守られる。一方, (13) は普遍的なものではないが, 英語ではかなり重要な規則である。(12) と (13) を利用して, (11) を言い換えると次のようになる。

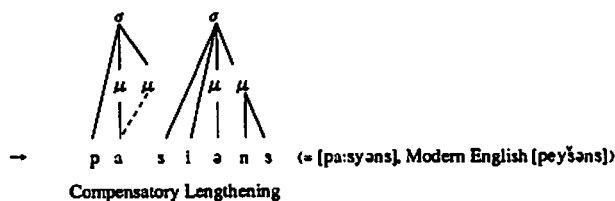


もし、[taalə] という段階があれば、モーラ理論は異なった説明をしなければならない。すなわち、語末の母音の消失の前に長音化が起こったのならば、代償的過程とは考えられないのである。

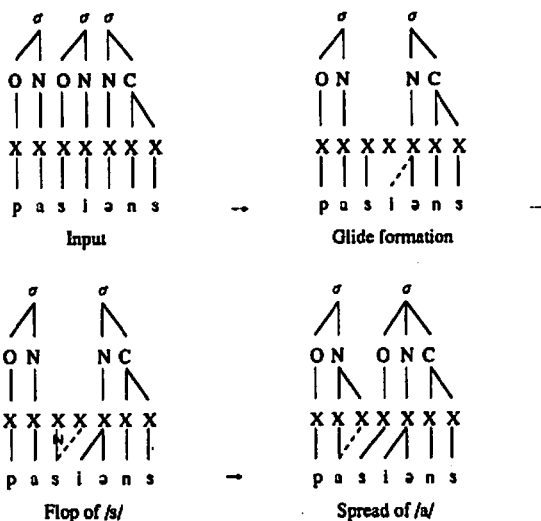
もう1つ、Hayes (1989) で説明が加えられている英語の長音化を考察してみる。これも中英語の例であるが、[iV] が [yV] に移るという半母音化が代償延長という形で長音化を引き起こすというものである。Hayes (1989) からモーラ理論とX理論による説明の比較を引用すると(15)のようになる。

(15) a. Moraic theory

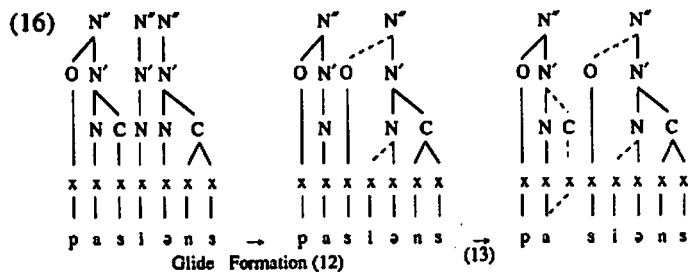




b. X theory



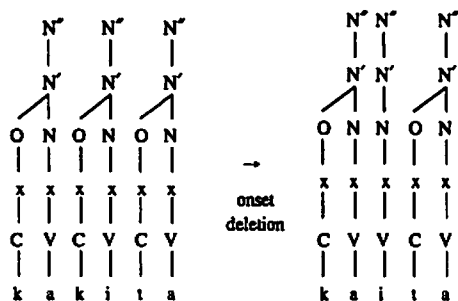
X理論の問題点は元々核だった位置に頭子音が来るところである。
これに対して、本稿での説明は次のようになる。



英語における長さの調節はN'に直接支配される節点という範囲で行なわれると考えることができる。

次に、日本語について考察する。ここでは日本語の音便を例にとってみたい。日本語にみられるイ音便、ウ音便、促音便、撥音便という四種類の音便については次のような構造を持つものと考えられる。

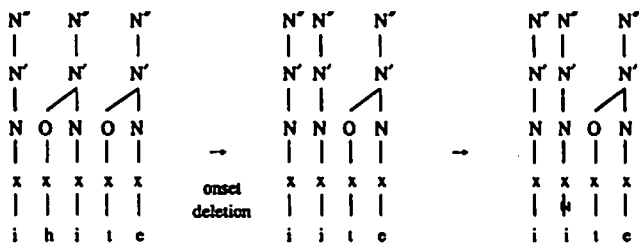
(17) a. イ音便 (「書きた」→「書いた」)



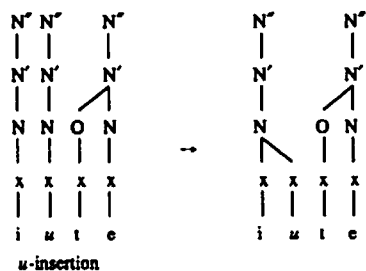
b. ウ音便 (「言ひて」→「言うて」)

促音便 (「言ひて」→「言って」)

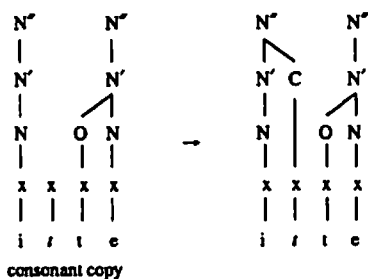
L (ウ音便・促音便共通)



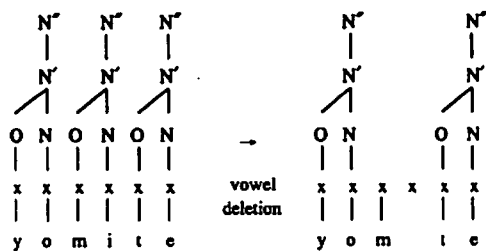
II. (ウ音便)

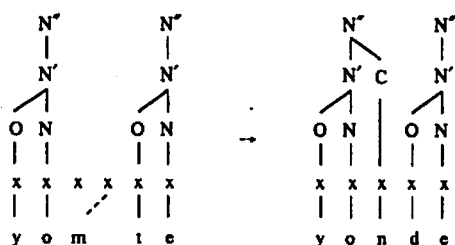


(促音便)



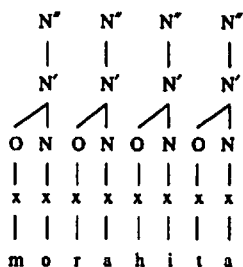
b'. 撥音便 (「読みて」→「読んで」)



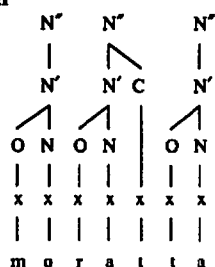


「書きて」が「書いて」になるウ音便は (17a) に示すように頭子音の消去と考えられ、代償的な隣接音の延長はない。スロット自体がなくなってしまうのである。それに対して、(18b) に示されるように、ウ音便と促音便では頭子音及び母音が消去される。その際、母音（核）の位置のスロットは消えてしまうことはないと考えられる。このスロットの埋め方によってウ音便と促音便の違いがあらわれる。すなわち「言ひて」が「言うて」になるか「言って」になるかである。また、(17b') に示される撥音便はウ音便・促音便の変形だと考える。ある特定の子音（m, n など）のときに、このタイプになりえる。「読みて」は「読うで」かあるいは「読んで」という音便形をとることができると考えられる。また、「貰う」という動詞に関して、関西方言では、「貰った (moratta)」に対して「もろた (moro(o)ta)」を経て「もおた (moota)」という発音がある。この過程は次のように説明できる。

(18) a. i



ii



!

II

The diagram illustrates the construction of the word "NONO" using the letters N, O, N, O, N, O. The letters are arranged in a grid, and arrows indicate the sequence of strokes used to form each letter.

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| N | O | N | O | N | O |
| N | O | N | O | N | O |
| N | O | N | O | N | O |
| N | O | N | O | N | O |

Arrows indicate the sequence of strokes used to form each letter:

- For 'N': A vertical line down, followed by a diagonal line from the top right to the bottom left.
- For 'O': A vertical line down, followed by a diagonal line from the top left to the bottom right.

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| V | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | W |
| | | | | | | |
| x | x | x | x | x | x | x |
| | | | | | | |
| N | O | N | N | O | N | O |
| ✓ | | | ✓ | | ✓ | |
| N | | N | N | | N | |
| | | | | | | |
| N | | N | N | | N | |

Diagram illustrating the construction of the word "WORM" using the letters W, O, R, M. The letters are arranged in a grid, and arrows indicate the sequence of strokes used to form each letter.

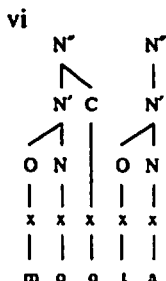
shoyng

| | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|
| W | O | I | O | I | A |
| | | | | | |
| x | x | x | x | x | x |
| | | | | | |
| N | O | N | O | N | O |
| ✓ | | ✓ | | | |
| .N | | .N | | .N | |
| | | | | | |
| .N | | .N | | .N | |

Summary

| | | | | |
|----|---|----|----|---|
| v | i | o | o | w |
| | | | | |
| x | x | x | x | x |
| | | | | |
| N | O | N | N | O |
| ✓ | | | ✓ | |
| .N | | .N | .N | |
| | | | | |
| .N | | .N | .N | |

A



注目すべき点は (18b) の iv から v の段階で, onset の /r/ が脱落しても代償的延長が起こらないということである。(17) や (18) から考えると, 日本語の代償延長は N'' に直接支配された節点すなわち N' と C のレベルでは起こるが, onset には適用されない。ここで提案するモデルでは従来言われているモーラより現実の姿をよく反映しているように思われる。

4. 結語

本稿では, 英語と日本語を比較して, その音節構造を考察した。両言語の音節構造は音節核 N の投射という基本的な概念によって表すことができることを示した。また, そのことから開音節と閉音節の言語について, その相違点はいわゆる onset と coda の部分がどの節点に直接支配されているかによるものとした。なお, 本稿では, 英語を中心に日本語との対比を行っただけで, その他の言語について検討を加えておらず, 多くの重要な問題を残したままにしているように思われる。しかし, 明らかに異なった英語と日本語の音節構造を明示的に捉えることができるということから考えて意義あるもののように思われる。

注

- ・本稿をまとめるに当たっては、折矢好弘教授から貴重な御助言を戴きました。ここに心よりの感謝の意を表したいと思います。なお、言うまでもなく本稿に関するすべての誤り及び問題点はすべて私の責任を負うものです。

1. 窪園・溝越(1991) 参照。
2. Hayes (1989) は、この定義とは多少異なった意味で代償延長という術語を用いている。
3. Parasitic Delinking の定義は "Syllable structure is deleted when the syllable contains no overt nuclear segment" (Hayes 1989, 268) であり、本稿でも、この考えを採用している。
4. 音節の有標性については Cairns and Feinstein (1982) 参照。
5. [-stress] の音節に関しては coda を持たないことが許され则认为られる。

参考文献

- Cairns, C. E. and M. H. Feinstein (1982) "Markedness and the theory of syllable structure," *LJ* 13, 193-226.
- Clements, G. N. and S. J. Keyser (1983) *CV Phonology: A Generative Theory of the Syllable*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Davis, S. (1990b) "The onset as a constituent of the syllable: evidence from Italian," *CLS* 26(2): 71-79.
- Everett, S. and Everett, K. (1984) "On the relevance of syllable onsets to stress placement," *LJ* 15: 705-711.
- Fudge, E. (1987) "Branching structure within the syllable," *JL* 23, 359-377.
- Hayes, B. (1989) "Compensatory lengthening in moraic phonology," *LJ* 20: 253-306.
- 服部四郎. (1979) 『新版音韻論と正書法』東京：大修館。
- Hooper, J. B. (1972) "The syllable in phonological theory," *Language* 48: 525-540.
- Ito, J. (1986) "Syllable Theory in Prosodic Phonology." PhD. dissertation. University of Massachusetts, Amherst. Published by Garland (1988).
- Jones, C. (1989) *A History of English Phonology*. London: Longman.
- Kiparsky, P. (1979) "Metrical structure assignment is cyclic," *LJ* 10: 421-441.
- Kiparsky, P. (1981) "Remarks on the metrical structure of the syllable," in W.

- Dressler et al. (eds.) *Phonologica 1980*, Innsbruck.
- Kubozono, H. (1993) "Perceptual evidence for the mora in Japanese," Paper to be presented at the fourth international conference on laboratory phonology, Oxford university, 11-14 August 1993.
- 窪園明夫・溝越彰. (1991) 『英語の発音と英詩の韻律』 東京：英潮社.
- Levin, J. (1985) "A Metrical Theory of Syllabicity." PhD. dissertation. MIT, Cambridge, Mass.
- Lowenstam, J. (1981) "On the maximal cluster approach to syllable structure," *LJ* 12, 575-604.
- Poser, W. (1986) "Japanese evidence bearing on the compensatory lengthening controversy," in L. Wetzels & E. Sezer (eds.) *Studies in Compensatory Lengthening*. Dordrecht: Foris.
- Selkirk, E. O. (1980) "The role of prosodic categories in English word stress," *LJ* 11, 563-606.
- Selkirk, E. O. (1982) "The syllable," In H. van der Hulst and N. Smith (eds.) *The Structure of Phonological Representations (Part II)*, Dordrecht, Foris.
- Selkirk, E. O. (1984) "On the major class features and syllable theory," in M. Aronoff and R. Oehrle, (eds.) *Language Sound Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Steriade, D. (1982) "Greek Prosodies and the Nature of Syllabification." PhD. dissertation. MIT, Cambridge, Mass.
- Vance, T. J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*. Albant, N.Y.: State University of New York Press.

甲南英文学会規約

第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英文学科に置く。

第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。

第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究発表会および講演会
2. 機関誌「甲南英文学」の発行
3. 役員会が必要としたその他の事業

第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。

1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）および甲南大学文学部英文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）を担当して、退職した者
3. 賛助会員

第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、編集委員長1名、幹事2名

2. 役員の任期は、それぞれ、2年とし、重任は妨げない。
3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によって、これを決定する。
4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
5. 会計、会計監査、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
8. 評議員は、会員の意志を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
12. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員について年間6,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数以上を以て成立し、その決議には出席者の過半数以上の賛成を要する。

3. 規約の改訂は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 編集委員会 第3条に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第10条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和59年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改定。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシス3部を添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙65ストローク×15行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文：横書A4判400字詰め原稿用紙30枚程度
 - ロ. 和文：ワードプロセッサまたはタイプライターでA4判15枚程度（1枚40字×20行）
 - ハ. 英文：タイプライター（ダブルスペース）でA4判25枚程度（1枚65ストローク×25行）
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 3rd ed. (New York: MLA, 1989)（『MLA 新英語論文の手引き』第3版 北星堂、1990）または *The MLA Style Manual* (New York: MLA, 1985) に、英語学の場合、*Linguistic Inquiry Style Sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 1) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は、必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正加筆は認めない。
6. 締切は11月30日とする。
7. 投稿者は、投稿料を負担するものとする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨をA4判400字詰め原稿用紙3枚(英文の場合は、A4判タイプ用紙ダブルスペースで2枚)程度にまとめて、3部(コピー可)提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、『甲南英文学』編集委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人30分以内(質疑応答は10分)とする。

甲 南 英 文 学

No. 9

平成6年6月20日 印刷

—非 売 品—

平成6年6月30日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658 神戸市東灘区岡本8-9-1

甲南大学文学部英文学科 気付
